

令和元年度「アートをテーマとした構想事業」 業務委託活動報告書

特定非営利活動法人ジャパンイニシアチブ

目 次

1. 本事業の目的	2
2. 今年度事業の目的	2
3. 今年度の事業概要（事業計画）	2
(1) 長和町に伝わる民話を漫画やイラストで表現する（詳細は後述）	
(2) 和紙を素材とした制作活動（詳細は後述）	
(3) サテライトオフィスの誘致	
(4) 「アートをテーマとした構想事業」専用ホームページの更新	
(5) 包括連携協定に向けた環境整備	
(6) 役場職員からの提案事業の検討（詳細は後述）	
4. 女子美術大学の教育活動としての取り組み	3
5. 和紙を素材とした制作活動	5
(1) 概要	
(2) 実施方法	
(3) 参加者	
(4) 現地訪問スケジュール	
(5) 学生作品	
6. 長和町総合文化祭での作品発表	18
(1) 概 要	
(2) 展示の様子	
7. アンケートの実施	20
8. 役場職員からの提案事業の検討	27
9. 来年度の事業展開	35
(1) 女子美術大学との包括連携協定締結に向けて	
(2) 女子美術大学の取り組み	
(3) 今後の取り組み事業（長和町としての取り組み希望事業）	
(4) 専用ホームページの更新	
(5) 女子美術大学浅野教授の授業について	
<別 紙> 女子美術大学の授業としての取り組み	36
<資料編> 学生が使用した民話	55

令和元年度「アートをテーマとした構想事業」は
以下の事業計画に沿って行うこととしました。

1. 本事業の目的

本事業の目的は長和町がアートの力で地域創生を行うことです。

女子美術大学生のデザイン力や発信力を活用し情報発信等の町の活性化を目指します。近年大学の社会貢献が求められています。教育機関として女子美術大学が地方自治体とともに地域の活性化を目指す事業を行うことは重要な意義があり、長和町の「アートをテーマとした構想事業」に取り組むことはそうした社会貢献活動の一環の事業として女子美術大学内で位置づけられていることなどから町と女子美術大学の間で包括連携の締結を目指します。

また、アート、クリエイティブ系の企業のサテライトオフィスを長和町に誘致、集積し、定住を含めた人口流入の可能性も模索し、地域の活性化を目指します。

2. 今年度事業の目的

今年度は「アートをテーマとした構想事業」の推進にあたり、女子美術大学と長和町との包括連携協定の締結を実現させるための環境整備のほか、これまでに町から提出されたアイデアの実現、地域資源を活かした企画の提案、具体的な連携事業の検討のための材料の洗い出しを行いました。また、これらの活動から生まれた作品を多くの皆さんに知って頂くことを目的として活用しました。また、平成29年度から継続して検討しているサテライトオフィス誘致の検討も行うこととしました。

3. 今年度の事業概要（事業計画）

今年度は町と女子美術大学の協議を経て、以下の事業を計画し、実施しました。

（1）長和町に伝わる民話を漫画やイラストで表現する（詳細は後述）

民話をビジュアライズする、キャラクター制作は学生との親和性が高いと考えられることから長和町で伝承されている民話を女子美術大学学生により絵本や漫画、アニメーション等でビジュアル化しました。

この取り組みは、女子美術大学の浅野教授の授業として、長和町に伝わる民話を女子美術大学の学生が絵本や漫画、アニメーション等で表現し、より親しみやすいかたちにすることで広く発信することを目的に作品制作を行いました。

(2) 和紙を素材とした制作活動（詳細は後述）

地域資源の活用の観点から、長和町の立岩地区に伝わる立岩和紙に着目し、和紙を使用した製品開発が女子美術大学の目指すところと合致すると考えられます。

今年度は学内全体から制作活動希望者を募り、和紙作り、長和町でのフィールドワークを行い、和紙を使った作品を制作しました。

(3) サテライトオフィスの誘致

町までのアクセス、インターネット環境、町の建物の使用状態について情報を収集しました。現段階では町へのアクセス、宿泊環境についてサテライトオフィスの誘致は難しいという結論に至りました。

実際に公共交通を使用したアクセスについて情報収集とアクセスを実行しましたが、引き続き検討が必要と考えました。今後も情報収集に努めます。

(4) 「アートをテーマとした構想事業」専用ホームページの更新

活動内容を速やかにホームページに掲載し、より分かりやすくするよう、内容の充実を計画し、令和元年度に行なわれた女子美術大学の授業で企画制作された作品や、その作品の題材とされた長和町に伝わる民話、また、アートをテーマとした構想事業の一環として実施された立岩和紙を使用して企画制作された作品を紹介しました。

(5) 包括連携協定に向けた環境整備

令和元年度は女子美術大学経営陣の変更があったことから、これまでの活動と今後の活動の継続性などを確認し、包括連携協定の締結の実現性をより深めるために、女子美術大学との協議をいたしました。

包括連携にむけて、現在女子美術大学の窓口であるアート・デザイン表現学科メディア表現領域だけでなく、工芸科やファインアート系の本事業への参加について大学に依頼しました。本年度は和紙を素材とした制作活動に立体アート科の学生の参加がありました。

(6) 役場職員からの提案事業の検討（詳細は後述）

役場職員からのアイデアの検討を含めて役場担当者、女子美術大学、ジャパンイニシアチブで実現性が高いものについて検討しました。

その一環として、女子美術大学の首藤講師が黒耀石のふるさとまつりへの参加し、事業の実施について検討しました。

4. 女子美術大学の教育活動としての取り組み

<女子美術大学の授業としての取り組みは別紙参照>

なお、広報ながわ令和元年7月号に下記のとおり紹介されました。

女子美術大学の皆さんが 長和町を訪問しました！

【長和町と女子美術大学の連携について】

長和町と女子美術大学は「アートをテーマとした構想事業」として、平成28年度から連携した取組を実施しています。この取組は、学生の発想力やデザイン力、発信力を活かし、長和町にある様々な事柄をテーマにして作品制作を行い、その作品を発表すること（情報発信）を通じ、町の活性化につなげることを目的の一つとしています。

これまでに、学生が何度か長和町を訪れ、作品制作などを行ってきました。昨年は、長門ふれあい館での児童とのワークショップ、長和町総合文化祭での作品展示を行っていただき、文化祭の中で行われた似顔絵デモンストレーションでは、訪れた皆さまの似顔絵をその場で描いていただきました。

今年度は、長和町に伝わる民話を漫画やイラストで表現し、より親しみやすい形態にすることで、子どもや若い世代に繋げること、多くの町の皆さまに知っていただく事を目標として活動しています。

【長和町での実地見学】

5月30日（木）、31日（金）の2日間、女子美術大学の学生が長和町を訪れました。立岩の和紙の里での紙すき体験や、民話の舞台となった場所へ足を運び、その場の雰囲気を味わっていただきました。都会ではなかなかできない、自然豊かな長和町ならではの体験や景色に、学生からは「景色が立体的だ」などの感想も聞かれました。2日間、楽しみつつも真剣に見学が行われました。

今回の見学について大学側からは、「大変参考になった。長和町自体の雰囲気を感知ったことで方向性を変えた学生もいる」との感想をいただきました。

【今後の活動】

学生の皆さんは今回の見学を参考に、それぞれの表現方法で、より具体的な作品制作に取り組みます。完成後、作品はアートをテーマとした構想事業のホームページで公開するほか、秋に開催される長和町総合文化祭での展示・発表も行う予定です。なお、総合文化祭での展示は、昨年の来場者アンケートも参考に、ドローンで撮影した映像など、来場いただく皆さまに、より一層楽しんでいただける内容を女子美術大学と検討していきます。

○アートをテーマとした構想事業

URL:<http://www.art-nagawa.jp>

※取組の中で制作した作品もご覧いただけますので、ぜひご覧ください。

諸事情によりこちらの写真は削除しました



駒形岩の視察

諸事情によりこちらの写真は削除しました

5. 和紙を素材とした制作活動

(1) 概要

長和町の立岩地区に伝わる立岩和紙に着目し、長和町の地域資源である和紙を使用した企画及び作品制作が、事業の一環として実施されました。信州立岩和紙の里を訪問し、立岩和紙に関する話を聞き、職人さんとのコミュニケーションを通して、和紙の里のニーズを探る取り組みが行われました。

和紙を使った製品開発も課題の一つであると伺ったことから、女子美術大学の目指すところと合致すれば、新しい展開や事業につながる可能性があります。

(2) 実施方法

長和町でのフィールドワーク、紙すき体験、作品構想を行いました。また女子美術大学として立体美術学科立体アート（彫刻系）の参加も募りました。

(3) 参加者

女子美術大学、美術学科立体アート専攻 2名（内 1名大学院生）

アートデザイン表現学科ヒーリング表現領域 3名、メディア表現領域 3名

担当教員 メディア表現領域 首藤圭介講師 早淵助教

(4) 現地訪問スケジュール

実施日時：令和元年 9月 3日（火）～ 5日（木）

行 程：

9月 3日（火） 13：00 長和町役場着

13：00～13：10 長和町役場にて高見沢副町長への挨拶

13：10～14：20 長和の里歴史館訪問 企画財政課職員より長和町の概要説明

15：00～17：00 町内各所をめぐるフィールドワーク

和田峠接待、町内の散策、和田宿、美しの池、本沢溪谷

9月 4日（水） 9：30～ 長和町役場にて羽田町長との面談

10：00～ 信州立岩和紙の里にて、和紙の歴史についてレクチャーを受講した後、紙漉き

14：00～17：00 追加フィールドワーク

9月 5日（木） 10：00～ 黒耀石体験ミュージアム見学・周辺散策

15：00 長和町発

*長和町役場 2階第 3 会議室を作品制作の場として調整

<訪問の様子>

9月3日

町舎にて高見沢副町長への挨拶



長和の里歴史館 企画財政課職員より長和町の概要説明と見学



本沢溪谷見学



和田宿と地域の方との語らい



美しい池



9月4日

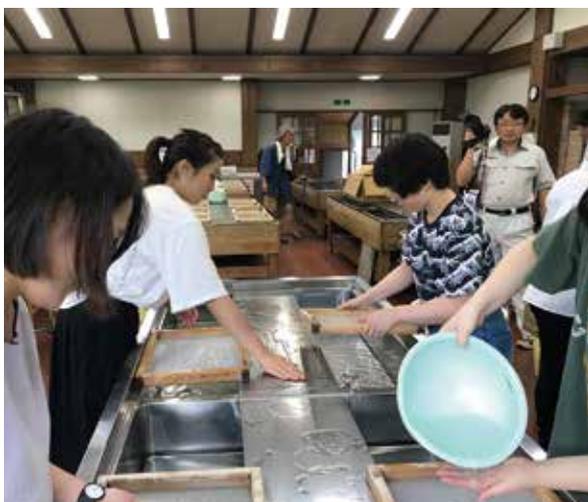
町長との懇談



和紙の里でのレクチャー



紙漉き





和紙の乾燥



出来上がりの確認



9月5日

黒耀石体験ミュージアム

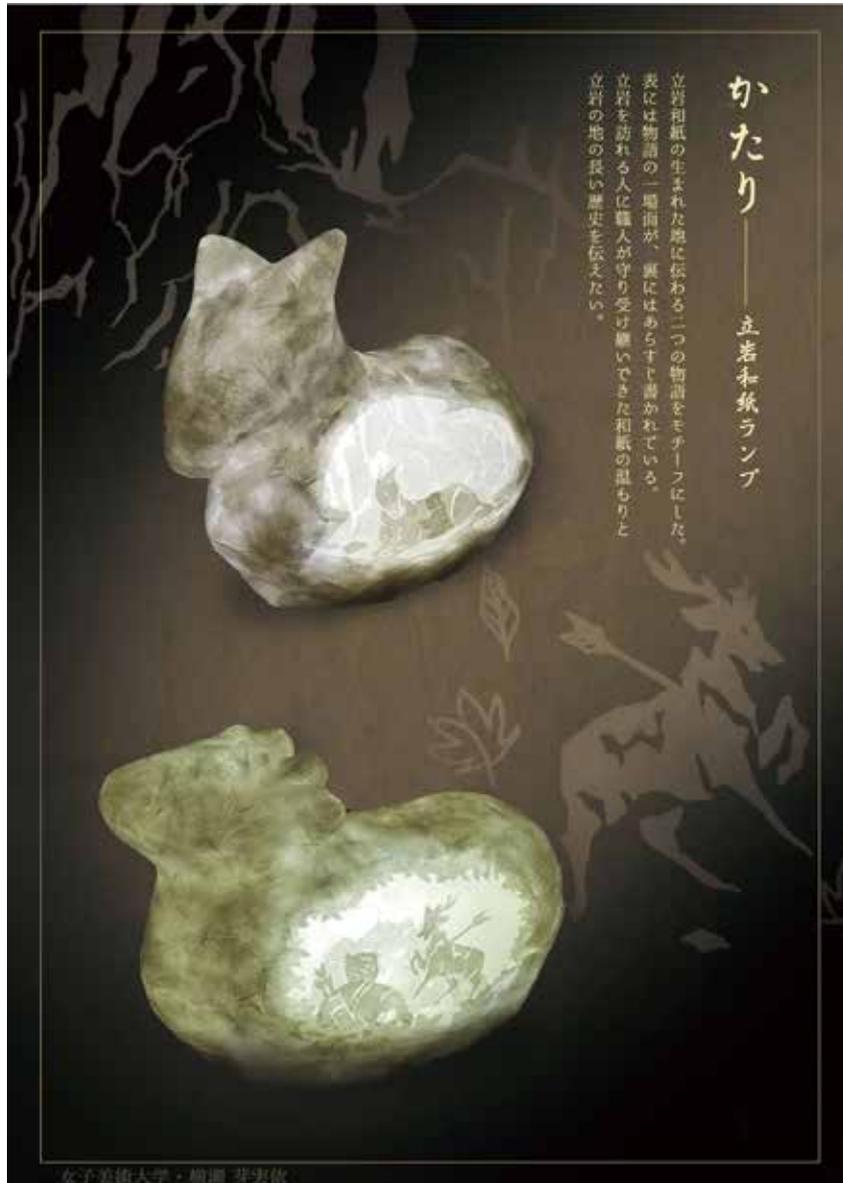


長和町役場での感想会



(5) 学生作品

①かたりー立岩和紙ランプ



②夏のおもいでぼうし

なつのおもいでぼうし



この帽子は、奥和歌のゆるキャラ「なっちゃん」の帽子から発想を得て作りました。9月の月に滞在した3日間では、森の甲斐もたいさう、そばの花畑が朝に広がった光景を見て、この町には美しい自然が溢れていることを知りました。そんな美しい町をコンセプトに設定し、空若紙紙で賑やかなデザインに仕上げ、帽子を製作しました。



林原 涼子



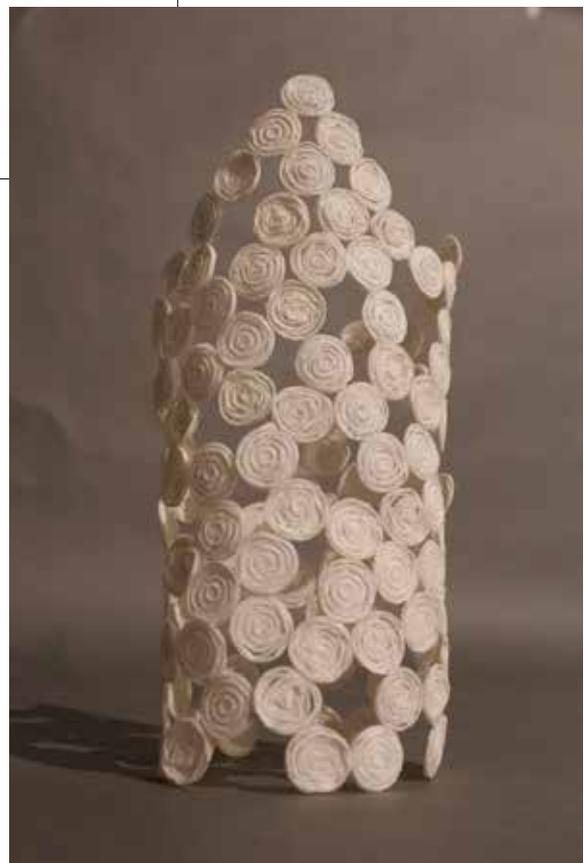
③渦



渦

藤澤 榮里

この作品は、長和町を巡り五感で受け止めたものを形に落とし込んだ。
長和町は、人と人が結びつき連携を取るコミュニケーションが強い場所だと感じ、また伝統や地に根付く歴史を大事にしている町だ。
しかし、それゆえの閉塞感も感じられた。伝統は、昔から受け継がれてきた有形無形の風習・文化であるが、それは内にある精神を轉るものでもあるのではないだろうか。
伝統、歴史、自然など町を象徴する場、概念に対し、風土愛に溢れている町だからこそ渦のようなものに飲み込まれていると感じた。
しかし、綻ばない渦はないとも考え、2016から続くこのプロジェクトを通して目には映らないが、新しい風は徐々に吹き込まれているのではないだろうか、と思い至り渦が少しずつ崩壊していくような立体物を制作した。



④長和町の楮和紙の白無垢髪飾り



姫街道

-Himekaido-

中山道は、姫宮の奥入れの通行が多かったことから「姫街道」と呼ばれ親しまれてきました。
そんな、期待と不安を背負った一人の女の子が花嫁になる道を、
蕎麦の花々が祝福する長和町のまっさらな楮和紙を使ったかんざしができました。



蕎麦の花

-Soba no hana-

蕎麦の花の花言葉は、
「幸福」「喜びも悲しみも」「あなたを救う」
大きな希望と少しの不安を抱える花嫁さんの
髪飾りとして、また、お守りとして
寄り添うモチーフです。

Misato Ichikawa



⑤灯をともしよう



⑥和紙コスメ

和紙コスメ

山崎真有佳

コンセプト
無機質な化粧品の外装を和紙のもつやわらかい印象で包みこみ、季節感を出すことによって女性の日常生活の中に華やかさと安らぎを感じてもらいたい。

立居和紙とは
長野県小県郡長和町の立居(たていぬ)地区で生産される手漉き和紙、地元産のコウゾを使用した丈夫な和紙で、江戸時代に農家の冬の副業として生産が始まったとされる。

今回の企画について
最初は和紙の食器を制作する予定であったが、石川風のオリジナルのブランド品としてそのような製品は既に存在している事を知り、諦めることになった。しかし、石川紙は一体どのような方法手法を使って食器を制作しているのか気になり調べてみた。すると、「樹脂ガラスコーティング」というものを和紙に塗ることによって耐熱性・耐油性を実現していることがわかった。そこで、その薬品を応用すれば化粧品ボトルも作れるのではないかと思い、今回の制作に至った。

-春-
新しい季節に、自分に、はじめるよ、春風ファンデーション
お花トップ、山吹カラー
残葉は口紅である



-秋-
紅葉の雫を思わせる、紅葉行りアイシャドウ
赤に染めた唇を、夕焼けメイクストロイム



-夏-
もっと可愛く、暑い季節をキープに、曇り空アーティフィシャルパフダー
フレッシュな爽快感、水と触れ、雨粒臭を消す



-冬-
雪のよさを思わせる、雪うさぎパフ
しっとり保湿、雪化粧可水、雪中山も一緒に雪化粧、初雪雪ホルダー





⑦和紙を身につける

和紙を身につける

- ・和紙の魅力が直に伝わるもの
- ・手に取りやすく、すぐ日常に取り入れやすいもの
- ・特別感、高級感のあるもの

今回長和町で和紙の手造り体験をさせていただいたときに、長和町の和紙がどのようにして継承されてきたのかをお聞きました。和紙は包装紙やパッケージなどに使われることが多く、職人さんから直接エンドユーザーに届くことはないという聞いて、とても残念だと感じたことがきっかけで、今回の作品を制作しました。日常に簡単に取り込むことができ、なおかつ高級・特別感のあるものを目指しました。



女子美術大学 芸術学部 アート・デザイン表現学科
ヒーリング表現領域 2年 霜田二千花



6. 長和町総合文化祭での作品発表

(1) 概要

長和町総合文化祭（令和元年11月2日、3日）にて作品を展示しました。

3日には首藤講師がステージに登壇し、さらなる素材の掘り起こしや商品企画開発などを進める方針で「空き別荘活用など具体的な企画を考えている。アート力で地域活性化につなげたい」と発表しました。

また、展示作品、女子美術大学との活動についてアンケートを実施しました。

(2) 展示の様子





7. アンケートの実施

長和町総合文化祭にて女子美術大学の作品展示等に関するアンケートを実施しました。

実施会場：長和町総合文化祭会場

実施日：令和元年11月2日、3日

有効回答数：63

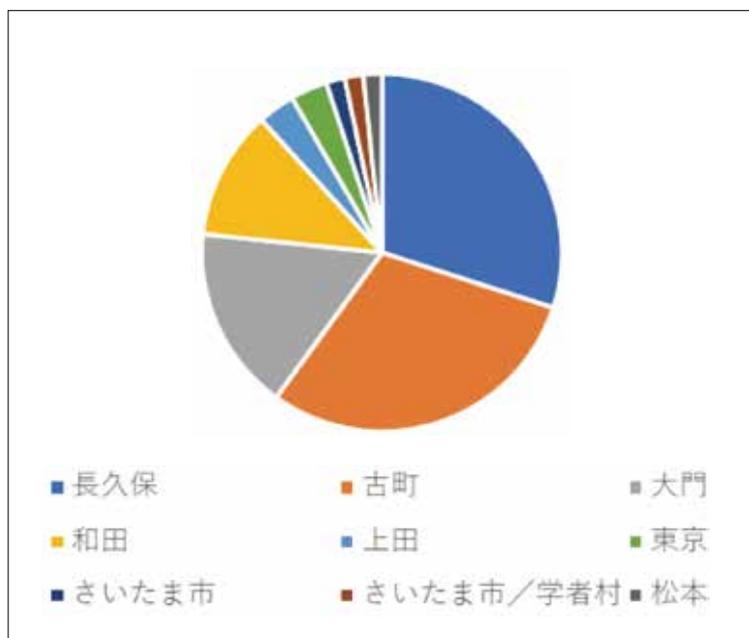
<アンケート結果>

1. ご来場いただいた方について

(1) 本日はどこからいらっしゃいましたか。

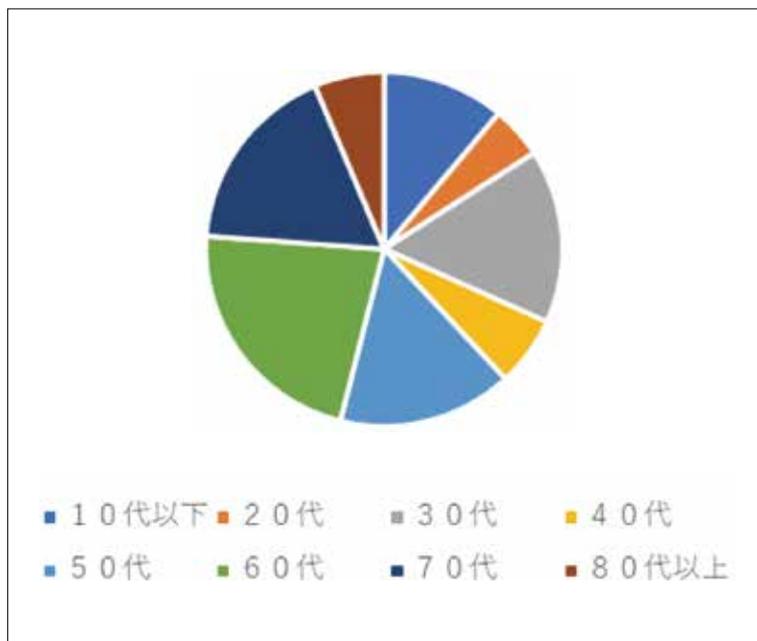
*未回答あり

長和町	長久保	18
	古町	18
	大門	10
	和田	7
町外	上田	2
	東京	2
	さいたま市	1
	さいたま市／学者村	1
	松本	1



(2) 年代を教えてください。

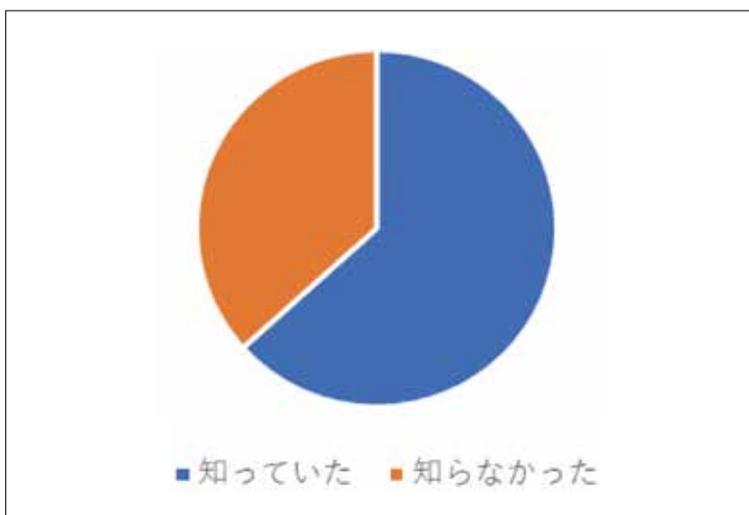
10代以下	7
20代	3
30代	10
40代	4
50代	10
60代	14
70代	11
80代以上	4



2. 女子美術大学について

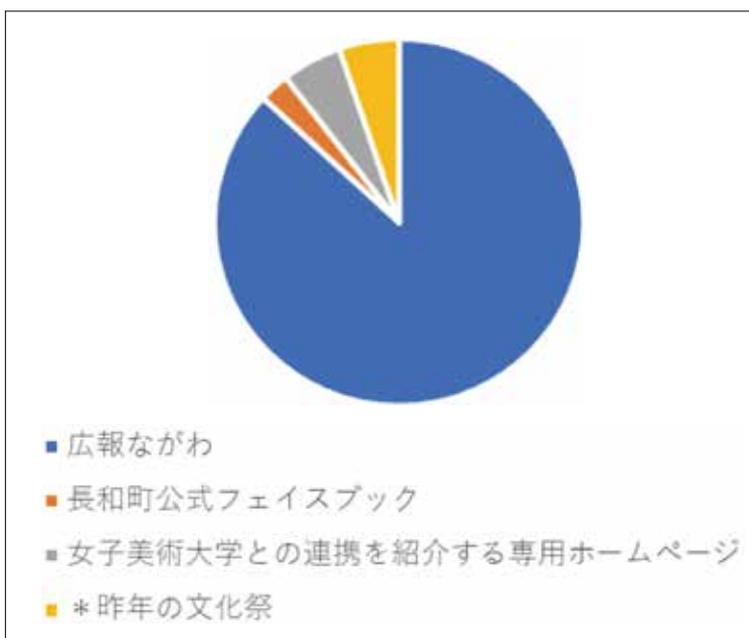
(1) 女子美術大学と長和町の連携した取り組みを知っていましたか。

知っていた	38
知らなかった	22



(2) 「知っていた」と回答した方にお聞きします。連携した取り組みについてどこで知りましたか。

広報ながわ	33
長和町公式フェイスブック	1
女子美術大学との連携を紹介する専用ホームページ	2
* 昨年の文化祭	2



3 女子美術大学の展示・ステージ発表について

今回の女子美術大学の展示やステージ発表についての感想をお聞かせください。

民話をビジュアライズした作品について

- ・ 和田の歴史をアニメで感じられたのが見やすかった。
- ・ 立体すごろくをととても楽しく遊ばせてもらいました（お子さんが）。
- ・ 立体すごろくを子どもたちがとても興味を持って見ていました。
- ・ 福笑いのようなゲーム。
- ・ 町の民話などを取り上げて頂いて、嬉しいです。これからも頑張ってください。
- ・ 絵を磁石でパーツをつけるのが色々な顔になり楽しめました。
- ・ ステージ発表が見られず残念でした。展示は上手でゲームがあり素晴らしかったです。クリアファイルや絵はがきも素敵です。
- ・ 長和町に民話があることを知りませんでした。浦和で読み聞かせとオカリナ演奏をしています。この民話を使わせていただきます。
- ・ むりえは児童館で利用したいです。
- ・ 地元に住んでいても知らないことを改めて教えていただけました。
- ・ 長和に歴史や物語があること等を知らず、60年生きてきました。今知ることができて、大変有意義でした。
- ・ 自分の地元ではないので、民話は知らなかったが素敵だと思いました。
- ・ 昔話で今まで聞いたことがなかった話等、興味が湧いてきました。
- ・ 絵巻物語りが良い。また民話について知らないことが多くあった。
- ・ 妖怪の絵が素敵でした。
- ・ 歴史ある民話を多くの人たちに興味を持ってもらえるよう、アニメ化したり、キャラクターを用いた説明をしたりと様々な工夫がしてあるなと思った。未来を担う子どもたちに伝えられるようメディア等を活用して広げてほしい。
- ・ とても良い取り組み。民話のテーマは面白い。
- ・ 民話をわかりやすく視覚化してあってとても良かった。
- ・ アニメやアートが流行している中で、古き良き伝統などを子どもや様々な人に伝える良いツールになると良いですね。
- ・ 物語にあう絵がとても上手で良いと思いました。

和紙の作品について

- ・ 立岩和紙の制作、特にランプが素敵でした。冊子はもう少し大きい方が良いです。
- ・ コンセプトもしっかりしていて、とても感心しました。子どもたち（8歳と10歳）がとても喜んでいました。
- ・ 大変積極的な活動を見て感激です。長和町のデザイン、商品開発にさらに協力してください。
- ・ 和紙はただ漉くだけでは興味ないが、化粧品のようなワークショップがあればやりたいと思う。
- ・ 素晴らしかった、我々にはない発想。何も無いことが良いことというのが素晴らしい。
- ・ 素敵。和紙がおしゃれである。書道や障子しか利用できないと思っていたが、こういうことにも利用できるのかと思った。
- ・ 和紙の使い方が楽しい。
- ・ かんざしが良い。民話はいいと思う。
- ・ 和紙の作品に興味を持ちました。作品のキット等があれば作ってみたいです。
- ・ 展示の字が小さくて見えにくい。来場記念のはがきの素材を立岩和紙で作ったらどうか。

その他の意見・感想

- ・ 都会の方が来てくれてありがたいと思う。
- ・ 町のPRになったらいいと思います。
- ・ 長和町の良さを活かした作品を見ることができて良かった。
- ・ クオリティが大変高く、楽しく見ることができました。様々なシーンで活用し、長和町のPRになったらいいと思います。
- ・ 色々と研究されていることを知って身近に感じられます。
- ・ 子どもが興味を持って見ていた。アイデアが面白い。
- ・ 私は高校まで長和町で過ごしましたが、その先は県内で過ごしています。長和町を知らない方が（都会の学生さん）長和町の昔を学んで現代のアニメや芸術的に仕上げてくださいって感動しました。長野県出身の新海監督のように、全国、世界へ田舎の良さ発信してください。素晴らしい作品でした。
- ・ 色どりがよく、素晴らしいと思います。
- ・ いろいろな取り組みがあって良い。
- ・ いいと思う。知らないことを知れた。

4 今後の取り組みについて

今後、女子美術大学と長和町は連携して情報発信などの事業に取り組む予定です。この中で取り組んでほしいことがあれば教えてください。

町民との交流

- ・ 町民に絵の教室を開いてほしい。
- ・ 子どもたちが喜ぶものを作ってくれと良いと思います。
- ・ 長門児童館の子どもたちと制作、ふれあいをしたいです。
- ・ 長門小学校で黒板アートをやってください。
- ・ 絵を教えてもらいたいです（小学校に）。

町内施設、イベントとの連携

- ・ 和田宿祭りで連携してほしい。
- ・ 和田宿場祭り
- ・ 伝統を活かしながら新しい発想で、全国区のものに盛り上げてほしい。
- ・ 例えば、長和町役場庁舎丸ごと美術館のような取り組みを期待している。
- ・ 新しくできる直売所でもPRを行ってほしい。
- ・ JRバスが赤字路線で本数がどんどん少なくなっています。若い人たちがバス旅行を楽しめるように、JRバスをアートにしてみたらバスの利用者が増えるのではないのでしょうか。

地域資源、特産品を活用した取り組み

- ・ 和紙の他にも、造形的なものを長和の特産と組合わせた作品が見たいと思いました。
- ・ 宿場町を活かした取り組み。山（町有林）や植樹と美術のコラボ。
- ・ 民話のストーリーをホームページに掲載してほしい。
- ・ 町の和紙で新しいものを作ってください。
- ・ 新しい感覚で商品開発につなげていただければ嬉しいです。若い世代にも影響を与えてください。
- ・ 長和の特産品を現代の若者に受ける方法で発信して、特産品を活かせるようにしてほしい。
- ・ 民話の放映（アニメ化したもの）。
- ・ 和紙を利用した作品の商品化。
- ・ 町の事業に民話を取り入れるよう、色々考えてほしい。
- ・ 立岩和紙が少しでも世に出るようになってほしい。
- ・ 技術の継承をするため（伝統工芸）に何ができるか。
- ・ 和紙を使った照明を作って、お土産を売り出す。
- ・ 宿場町として存在しているので、作品展など町の活性化に協力いただければと思います。

その他の意見・要望

- ・ 長和町との交流をもっと盛んに。
- ・ ケーブルテレビに出てください。
- ・ 映像、テレビ放送して欲しい。
- ・ 町の番組でどんどん発信して貰えば、町の皆さんもきっと感動すると思います。
- ・ 明かりが活かされたもの。ネクタイの質感が布のようであれば。カルタも。
- ・ 釣りざおを作ってほしい。長和町を全国へお願いします。
- ・ 町にいかにか人を集められるかを、新しい感覚で一度まとめてもらいたい。
- ・ 長和町を PR できるようにお願いします。
- ・ 心が豊かになるよう、長和町を活気づけてください。期待しています。
- ・ 広がりがイマイチ。もっと積極的に取り組んでほしい。応援しています。
- ・ わからない。
- ・ やりたいこと、取り組みやすいことをして欲しい。
- ・ 長和町の魅力を学生さんたちからの作品で見せてもらいたいです。楽しみにしています。
- ・ 映像にすると見たくなると思う（耳で聞くのもよいが）。
- ・ 各世代に伝わりやすい形で情報発信してほしい。この取り組みをすごく応援している。
- ・ 女子美の存在を初めて知りました。過疎の町なので若い人たちの存在は貴重です。

以上

<アンケート結果から>

主に広報ながわを通じた事業紹介により、長和町と女子美術大学の連携の認知度が上がっています。

民話のビジュアライズ作品については来場者に好評であり、取り上げられた民話の存在を知らなかったが、読み聞かせで使いたい、ぬり絵を利用したい、民話を知ることができて有意義だったなどの意見がありました。和紙作品についても好評で、作品への興味から町民から企画の提案がされました。

このようなことから事業目的を概ね達成できたと考えられます。

今後町民との交流、町内のイベントとの連携、地域資源・特産品を活用した取り組みを行って欲しいなどの意見を、今後の事業展開に活かすべきと思われます。

8. 役場職員からの提案事業の検討

長和町役場では、女子美術大学と連携して取り組みたい事業の検討が行われました。その結果は、「取組事業案一覧 令和元年9月30日版」として下記のアイデアが女子美術大学に提出され、大学内でも検討が行われました。

【令和元年9月30日 事業案追加】

長和町職員からの事業案に基づく取組 事業案一覧

番号	内 容	補 足 事 項
1	黒耀石を広くPRするイメージ戦略についての検討 ※関連：15	<ul style="list-style-type: none"> 別紙「Obsidian art 創生プロジェクト」 平成29年度募集
2	女子美大生の感性を活かした「アート×空き家」の協働事業	<ul style="list-style-type: none"> 別紙「長和町地方創生推進本部若手職員による職員プロジェクトチーム報告書（グループD）」のとおり。 平成28年度事業成果中、井口真緒さんの「長和町空き家リノベーションプロジェクト」と類似した内容。空き家を学生の発想でリノベーションする。 平成29年度募集
3	総花的になりがちな町のPRイメージづくりへの協力 ※関連：20	<ul style="list-style-type: none"> 町全体をイメージできるようなイメージ素材づくりを行い、それを基に各種事業計画を立案。（商工観光係） 平成29年度募集
4	町各種計画等への挿絵などをお願いする	<ul style="list-style-type: none"> 防災関係（避難場所の明示、避難経路、災害時の対応等）をまとめ全戸配布。 町の計画の冊子への挿絵。 平成29年度募集
5	農産物のPR	<ul style="list-style-type: none"> ブロッコリー普及のためのチラシ作成。和田青年農業者クラブからの受託。町としても、普及を目指している。（ミニトマト、アスパラ等も。栽培者は限られるが、町としてのPRならば可能か） 平成29年度募集

番号	内 容	補 足 事 項
6	町関係イベントのポスター作成	<ul style="list-style-type: none"> ・ 和田新そば祭り等のイベントポスターのデザイン ・ 平成 29 年度募集
7	PRのためのバス・公用車のラッピング ※関連：28	<ul style="list-style-type: none"> ・ 町のPRのため、町のバス（和田バス委託）やJRバス、和田バスにラッピング。デザインを女子美大生に考えてもらう。 ・ 公用車に長和町と分かるようなステッカー等を貼り、走る広告塔としてPRできるようにする。（平成30年度追記） ・ 平成 29 年度募集
8	公共施設に絵を描く 関連：10、13、17	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新庁舎裏側へ絵を描く。庁舎北側が寂しい。長和町らしいデザインを女子美大生に考えてもらう。実際に描くのは町民。 ・ ながと保育園のプールのフェンス、保育園バスのバス停への女子美大生によるペイント。（学生の作品展示の場所としての活用もよいのでは。） ・ 平成 29 年度募集
9	長和町の特産品や企業、団体の「物語」掘り起こし、それを紹介する本（漫画）をつくってPRする	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長和町の特産品（奨励品）について、その品物ができるまでの物語や事業者そのものについて、を奨励品事業者に取り組み、漫画で表現してもらい、PRに活用する。（例：「ダッタンそば物語」）長和町奨励品に認定されれば、女子美大の皆さんにそのような漫画を描いてもらえるという制度にすれば、奨励品認定のメリットにもなる。 ・ 長和町にある企業について、その製品や会社についての物語を漫画にしてもらう。商工会等を通じ募集。その企業にある物語をPRすることで、人材募集の観点からもメリットがあるのではないか。（例：クルミ加工をしている会社にクルミのことを聞き、それをPRするなど） ・ 長和町にある団体をPRしてもらうのも良い。 ・ 女子美大生の皆さんに、直に話を聞いてもらい、その品物や企業、それらに関わる人を良く知ってもらった上で取り組んでいただきたい。

番号	内 容	補 足 事 項
9	<p>長和町の特産品や企業、団体の「物語」掘り起こし、それを紹介する本(漫画)をつくってPRする</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「長和町〇〇物語」などでシリーズ化し、ある程度たまったところで、広報と一緒に配る、学校に配布して長和町を知ってもらう一助とする等もできるのではないか。 ・作成したものは、ホームページ等を通じて町の知名度向上のためのPRに活用するほか、それぞれの事業者にも有効活用してもらおう。 ・平成29年度募集
10	<p>リアルな人形を作り、町内の観光地等に設置 ※関連：8、13、17</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・木工業者の方が、下和田バイパスの花畑に花の絵を描いている様子の人形を設置したが、現実の人に見間違ふほど良くできていた。 ・ほのぼのしていて長和町の雰囲気合っているのではないか。 ・観光客もそれを見て足を止めていたが、そういうものを町内各所に置き、マップのようなものを作り、探してもらうのも面白いのではないか。 ・平成29年度募集
11	<p>長和町に伝わる民話を漫画にしろ、冊子を作ったり、ホームページ等でPRする。また、アニメーション化してCATVで放送する</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・長和町に伝わる民話(昔話)を漫画にしろ。デジタル技術を使った絵本にしろ、ホームページ等で公開、多方面からアクセスできるようにする。 ・長和町に伝わる民話(昔話)をアニメーションにしろ、町のCATVで放送する。 ・長和町に伝わる民話(昔話)を知らない人が多いと思うので、漫画やアニメにして多くの人に知ってもらうことは意味のあることではないか。 ・小中学校の先生方から、「町の民話や伝承、歴史を子どもたちに判り易く伝えられれば・・・」と要望を受けている。(平成30年度追記) ・まずは別紙「まんが長和昔ばなし」の中から2、3選んでもらい、漫画や紙芝居をつくってもらおう。(平成30年度追記) ・平成29年度募集

番号	内 容	補 足 事 項
12	<p>動く黒板アートの作成 (和田中学校の黒板を活用)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長和町の春夏秋冬を黒板（和田中学校のもの）に書いてもらい、それを何回か書き換えてパラパラ漫画のような動画を作成する。 ・ 作成過程を公開したり、メイキング映像をドキュメンタリー風に撮影したりしても良い。 ・ 平成 30 年度募集
13	<p>長和町のイメージアップのため、バス停に絵を描いてもらう ※関連：8、10、17</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ テーマ性がある絵を書いてもらい、スタンプラリーではないが、バスに乗りながら各バス停を回ってもらうのも良い。もしくは、バスの走る順番にストーリー性を持たせるというのも面白い。 ・ 7番のバスのラッピングと絡めて、お揃いのデザインで作成しても良い。 ・ 平成 30 年度募集
14	<p>ウォーキングロードマップのコース図にイラストを書いてもらう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 平成 31 年度に取り掛かる予定 ・ 健康づくりのために「ウォーキングロードマップ」（町内に何箇所か設置）の作成を検討している。そのコース図をイラストで描いてもらう。 (コースは、健康づくり推進委員等にも関わってもらい、今後検討予定。) ・ マップはパンフレットを想定。看板は検討していない。 ・ 平成 30 年度募集
15	<p>長和町の黒耀石を基にしたキャラクターの作成 それをもとにした、原付の「ご当地ナンバー」のデザイン ※関連：1、21</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長和町の黒耀石に関する遺跡が日本遺産になったことから、この機会に黒耀石のキャラクターを考えてもらう。 ・ 黒耀石のキャラクターは原付などの「ご当地ナンバー」として使用すれば、走る広告として黒耀石や長和町をPRすることができる。 ・ 公式キャラクターのなっちゃんとのすみわけが必要になる。 ・ ご当地ナンバーだけでなくPRキャラクターとして活用可能か。もしくは非公式キャラクターとしての活動も可能か。 ・ 平成 30 年度募集

番号	内 容	補 足 事 項
16	「田舎暮らし体験住宅」関連の印刷物及び移住施策全般のトータルデザイン	<ul style="list-style-type: none"> ・平成30年度から利用開始した「田舎暮らし体験住宅」の案内図や掲示物、パンフレット等、また長和町の移住施策全般について「トータル的にデザイン」してもらう。 ・平成30年度募集
17	<p>観光客を呼び込むような、目玉となるアート作品（体験・見学型）の作成</p> <p>※関連：8、10、13、18</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・長和町をPRすることはもちろんだが、それによって観光客の誘致が図れればなお良い。 ・町の観光地というと町内から離れた長門牧場メインになっているが、何か目玉のアート作品（地域によっては田んぼアート、ひまわり迷路）など体験、見学できるもので、町内に観光客を呼び込み、おもてなしをすることによってリピーターを増やしたい。 ・平成30年度募集
18	<p>テーマ性のある彫刻の作成・展示（町内数箇所）</p> <p>※関連：17</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・役場や観光施設（観光地）に一連の繋がり（テーマ）を決めて作った彫刻を飾る。そのもの自体がインパクトがあり、目印にもなる目立つものを幾つか置きたい。 ・プレートに学校名と学生名を入れ、学生の作品展示としても活用できれば良い。 ・平成30年度募集
19	マンホールのデザイン	<ul style="list-style-type: none"> ・数種類考えてもらい、町内各地に1枚ずつ配置して、スタンプラリー的なことに活用したり、マンホールカードを作成してPRに使用したりする。 ・外国人にも人気がある。 ・平成30年度募集
20	<p>長和町のPRのトータルデザイン</p> <p>※関連：3</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでに募集した事業を分析すると、長和町の知名度向上のため、更なるPRが必要と考えられる。さらに、町の知名度向上について、それぞれの部署がそれぞれに努力しているが、PRについて統一感を持たせることも必要かと思われる。（もちろん、関係する各部署の皆さんの意見を聞くことが必要となる。）

番号	内 容	補 足 事 項
20	長和町の PR の トータルデザイン ※関連：3	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今まで寄せられた事業案を女子美術大学に提供し、その内容を考慮しつつ、町を更に研究してもらう。さらに、町として統一感を持たせたイメージで町全体としての PR 戦略を提案してもらい、町関係の各課係・関係機関が協力して女子美術大学と連携した PR を進める。 例えば、「長和町 × 女子美 デザインの力で長和町を元気に！」とか何とかお題目をつけて、PR を行うことも検討したい。 ・ 平成 30 年度募集
21	長和町非公式キャラクターの 作成 ※関連：15	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長和町の公式キャラクターといえば『なっちゃん』だが、公式であるがゆえにいろいろと制約がある。そこで、PR キャラクターとしての新しいキャラクターを、一から作成してもらい、運用についても自治体が関与せず、独自の活動を行っていただく形で運用してほしい。 ・ イメージとしては、千葉県非公式キャラクターでゆるキャラブームの先駆けとも言える『ふなっしー』や、佐久市中込商店街で誕生し、様々なイベントでフリーダムに活躍している非公式キャラクターの『ハイブリッ子ちゃん』の様な存在。または、ツイッター上で様々な映像（その多くがかなりの暴走映像）を投稿している、秋葉原観光推進協会キャラの『ちいたん』ツイッター登録 2 年あまりで 72 万フォロワーを獲得している）。 ・ 町に定着している『なっちゃん』を廃するわけではなく、『なっちゃん』とは別に、あくまで独自に PR 活動することが目的。（不真面目でも大いに結構！というスタンスで）。 ・ 平成 30 年度募集
22	作品制作過程の公開 （小学生・中学生が見ることができるよう） 関連：25	<ul style="list-style-type: none"> ・ 制作を小学校や中学校でしてもらい、その制作作業を公開する。 制作する姿は子供たちへ良い影響を及ぼすのではないかな。 ・ 平成 30 年度募集

番号	内 容	補 足 事 項
23	アーティストやクリエイターが集まるスペースをプロデュース	<ul style="list-style-type: none"> ・ 女子美大の皆さんがプロデューサーとなり、町内にアーティストやクリエイターが集まるスペースを作る。 (例) 和田庁舎の2,3階をいくつにも間仕切り、アーティストやクリエイターの発表場所にすれば、これまでと違った集客方法になる。 ・ 町に新しい集客方法ができたり、町民に埋もれていた作家などの活躍の場を提供できたりと、新たな客層の開拓と町民の能力、再発見ができる。また、人が集まれば商売に繋げていくことができる。 ・ 女子美術大学にとっても、他者の作品を見ることで、視野を広げ、自分の作品の更なるバージョンアップができ、また、今後、社会に出て行く際に必要な視点（マーケティングや顧客開拓等）を養うことができるというメリットがある。 ・ 平成30年度募集
24	庁舎の正面入り口案内の作成	<ul style="list-style-type: none"> ・ 来庁者が正面入り口ではなく、国道側の入り口から入ってきてしまう。総合案内窓口がある正面入り口から入って来てもらえるように看板を作成する等、良い誘導方法を考え、デザインしてほしい。 ・ 平成30年度募集
25	ふれあい館の子どもたちとの交流 関連：22	<ul style="list-style-type: none"> ・ 放課後、ふれあい館に来る子どもたちと、触れ合ってもらいたい。触れ合う中で、子どもたちからの要望（絵を描く、工作する）に答えてもらえればよい。 ・ ゆくゆくは、行事として黑板アート等の制作過程を見せってもらう等の取組も可。（最初からワークショップ等を行うと、子どもたちも身構えてしまう。触れ合う中で子どものニーズを探してもらえれば。） ・ (参考) 時間帯は平日の15時から17時の間（閉館は19時くらいまで。多くの子どもがいる時間帯がその2時間。低学年は15時から。3年生以上は16時から。）人数は50～60人程度。

番号	内 容	補 足 事 項
25	ふれあい館の子どもたちとの交流 関連：22	<ul style="list-style-type: none"> ・ 職員が足りず、いてもらうだけでもありがたいが、以前美大卒の職員が、新聞紙等で工作をしてくれた。そのような感じで触れ合ってもらえるとありがたい。 ・ 平成 30 年 10 月 5 日追加
26	直営別荘地の施設等のトータルデザイン	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長和町直営別荘地のPR・イメージアップにつながる統一的なデザインの考案をしてほしい。 ・ そのデザインに基づく施設及び古くなってしまった別荘地案内看板・規制看板・標識のデザインを考案して頂きたい。 ・ 予算等に応じて、実現可能なものを相談していく。 ・ 令和元年度募集
27	認知症サポーター養成講座 受講者向けグッズの デザイン構想	<ul style="list-style-type: none"> ・ 認知症サポーターキャラバンのイメージカラーであるオレンジを基調に、なっちゃんを用いた長和町オリジナルグッズのデザインをしてほしい。 ・ 作成を検討している製品は、費用面を考慮し、比較的安価に作成することができる缶バッジやストラップ等を検討している。 ・ 令和元年度募集
28	町内循環マイクロバスの ラッピングデザイン ※関連7	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新しく購入するワゴン車（トヨタハイエース等）のラッピングデザインを考案してほしい。 ・ 必ず全面ラッピングで、という訳ではなく、予算に応じて、ワンポイントでも町のPRにつながるようなデザインにしてほしい。 ・ 町内循環バスと呼ぶのも寂しいので、「～号」のような名前をつけることも検討している。 ・ 令和元年度募集
29	ふるさとCM大賞への 作品応募	<ul style="list-style-type: none"> ・ 長野朝日放送主催「ふるさとCM大賞」に女子美術大学として作品の応募を検討して頂きたい。 ・ 女子美術大学ならではの手法（アニメーション等）を用いて、作品を作って頂きたい。 ・ 令和元年度募集

9. 来年度の事業展開

(1) 女子美術大学との包括連携協定締結に向けて

これまでの活動実績から、長和町において町民の本事業に対する認知度が向上してきていると同時に、総合文化祭でのアンケート結果や、町職員からのアイデアを踏まえると、女子美術大学と長和町が連携して事業を行う事への期待が大きいと考えられます。

女子美術大学においても今後の長和町での活動をより円滑化し、大学全体の取り組みとしての活動としていくためには包括連携協定の締結が必要です。

これらの事から、令和2年度の早い段階において包括連携協定の締結ができるような取り組みを行います。

(2) 女子美術大学の取り組み

女子美術大学全体で本事業について情報共有を行い、大学として包括連携協定の締結を目指します。

また本事業の中で生まれた作品は大学と町での共有の可能性があることから、著作権法に沿った作品の使用契約を検討中です。あわせて、作品制作者の氏名表示の問題も検討しています。

(3) 今後の取り組み事業（長和町としての取り組み希望事業）

本事業の実施にあたり寄せられている職員のアイデアや長和町総合文化祭において寄せられた意見などを踏まえ、長和町から、以下の具体的な取り組みについて提案がありましたので、実施の検討をします。

- ・ 令和2年度に実施を検討している事業
- ・ 役場職員着用ポロシャツのデザイン制作
- ・ 町内巡回バスのラッピングデザイン制作
- ・ 認知症サポーター養成講座受講者向けオリジナルグッズ制作
- ・ 女子美術大学学生のふれあい館訪問（平成30年度事業のような取り組み）
- ・ 長和町総合文化祭への参加（令和2年度は10月31日～11月1日開催予定）
- ・ 令和元年度の成果物を活用した防犯イベントでのクリアファイル配布

(4) 専用ホームページの更新

活動内容を速やかにホームページに掲載していきます。

(5) 女子美術大学浅野教授の授業について

女子美術大学浅野教授の授業については、令和元年度と同様に実施されます。具体的な開始時期、長和町でのフィールドワークの日程は現在検討中です。

<別 紙>

女子美術大学の授業としての取り組み

1. 長和町に伝わる民話を漫画やイラストで表現する

女子美術大学の教育活動として、浅野教授の以下の授業が令和元年5月から6月にかけて実施されました。今年度は長和町に伝わる民話をテーマとして作品創りが行われました。

民話を町と女子美術大学が共有し、お話を可視化することで町のPRツールとなるよう検討しました。

<授業計画 女子美術大学シラバスより>

目 標：外部の企業や組織との企画立案と共同作業を通して、プロジェクト進行と実現を実践的に学ぶ。

授業内容：産学連携を基本として、公共団体、企業、法人等とのコラボレーションにより、実現可能な目標をたててプロジェクトを立ち上げていく。企画立案と運営、マネジメントを行うためにチームを編成し、問題点に対処しながらプロジェクトを円滑に進める方法を学習する。外部組織との関係による実践的な体験を通して、最終的にプロジェクトを完成させるまでのプロセスを体験学習する。美術大学におけるアートとデザインの専門教育の中から生まれる女性のクリエイティブな感性と、企業や外部組織のプロフェッショナルで専門的な現場体験により、新たな発想のプロジェクト開発の可能性を探ることを目的とする。また、共同作業(コラボレーション)を進める上で必要となるコミュニケーション技術等の習得を図る。各自の個性や資質を生かした役割を分担し、コラボレーションを実行するための知識を集約し、具体的にプロジェクトを実行する中で、実際面で生かすことの出来る創造性を培うことを目指す。

2. 実施方法

参加する学生それぞれが民話を選択し、内容及び時代背景などを事前に調査した上で長和町を訪問し、ロケーション等の現地調査を行いました。その研究・調査結果を元にビジュアル化を実施しました。

長和町訪問ではできるだけ多くの民話の収集を行うことを目標にしました。

*学生がビジュアル化した民話は<資料編>をご参照ください。

3. 参加者

芸術学科アートデザイン表現学科メディア表現領域 学生：10名

担当教員 メディア表現領域 浅野正博教授 早瀬仁美助教

4. 現地訪問スケジュール

実施日時：令和元年5月30日（木）～31日（金）

長和町プロジェクト2019現地見学日時：2019.5.30（木）～31（金）

行 程：

5月30日（木）

上田駅到着後

10:30～11:00 （株）岡崎酒造（上田）（株）信州銘醸（上田）見学

長和町到着

11:30～13:00 信州・立岩和紙の里（紙漉き体験：1時間～1時間半）

14:00～15:30 駒形岩、マルメロの駅ながと、依田川、ドライブイン中山道

16:00～ 夜の池、女神湖、かぎ引き石

5月31日（金）

～10:00 蓼科山が見える場所

11:30～12:30 長門牧場、黒耀の水、和田峠の棚田、和田宿

15:30～ 黒耀石石器資料館

<訪問の様子>



キャラクター紹介 3

「おまじない」のキャラクター「龍」のイラストです。

龍は、おまじないの世界で最も重要な存在です。龍は、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。龍は、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。龍は、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。



キャラクター紹介 4

「おまじない」のキャラクター「おまじない」のイラストです。

おまじないは、おまじないの世界で最も重要な存在です。おまじないは、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。おまじないは、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。おまじないは、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。



キャラクター紹介 5

「おまじない」のキャラクター「おまじない」のイラストです。

おまじないは、おまじないの世界で最も重要な存在です。おまじないは、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。おまじないは、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。おまじないは、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。



キャラクター紹介 6

「おまじない」のキャラクター「おまじない」のイラストです。

おまじないは、おまじないの世界で最も重要な存在です。おまじないは、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。おまじないは、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。おまじないは、おまじないの世界を守護し、おまじないの世界を導く存在です。



ファンジョレット

この世界の真実を知ること、今の世帯同様のことがよくわかるものとなっています。



NAGAWA FANTASY's MAP



エピソードコレクション

官能効果と、目撃証が一目でわかるものとなっています。



<作品・ゲーム画面>



②さいころゲーム

<ゲーム内容>

ゲームのやり方

※このゲームは最大九人プレイ可能。(一人は審判)

一・・・参加者はジャンケンをしてください。勝った者がこのゲームの審判になる。

二・・・伏せたマグネットシートを引く。
シートの絵が男性なら男性の顔のパーツを女性なら女性の顔のパーツを集める。

三・・・サイコロを振り、止まったマスの指示に従う。
*赤文字・・・必ず止まること(挑戦の審査は審判が行う)
*青マス・・・シートが男性のみ有効
* マス・・・シートが女性のみ有効
 ※異性のカラーマスに止まった場合無効
*白マス・・・全員有効
捨てるパーツが指定してあれば、それに従うこと。

四・・・ゴールは真楽寺である。サイコロの出た目より少ない回数でもゴールができる。
最後、出来上がった顔を審判に見てもらい、華麗・素敵と判断した場合、
ゲーム成功となりゴールができる。

<作品>



③タペストリーと民話カード

<企画書>



長和町 × 女子美術大学
～民話を通じたアートプロジェクトコラボレーション～

ヒーリング表現領域3年 47番 伊東けい

～コンセプト～

- ①長和町の民話を知らない人でも簡単にどこにどんな民話があるのかを知ってもらう
- ②民話が生まれたゆかりの地が実際に残っているので、興味を持った場所に訪れてもらう

↓

一目でどこにどんな民話があるのかわかる
タペストリーと民話カードを作成



実際に長和町には30以上の民話がありますが、今回はその中でも他の学生がそれぞれの作品の中で扱っている民話を中心に紹介します

タペストリー

長和町の地形や民話のある場所が一目でわかるタペストリー

今回は長和町の数ある民話の中から以下の8つをご紹介します

- 鳥羽山の古狐
- 小豆とゴの女
- 不問どうるく神
- 大地と木木
- 四巻の池
- かぎ引き石と河童の池
- 清水城の狐
- 草料山と甲賀三郎



民話カード

裏面




裏面にはその民話について簡単なストーリーが書いてあります

そして民話を知った人たちは、実際に今も残っている場所を訪れてもらう...

不問どうるく神

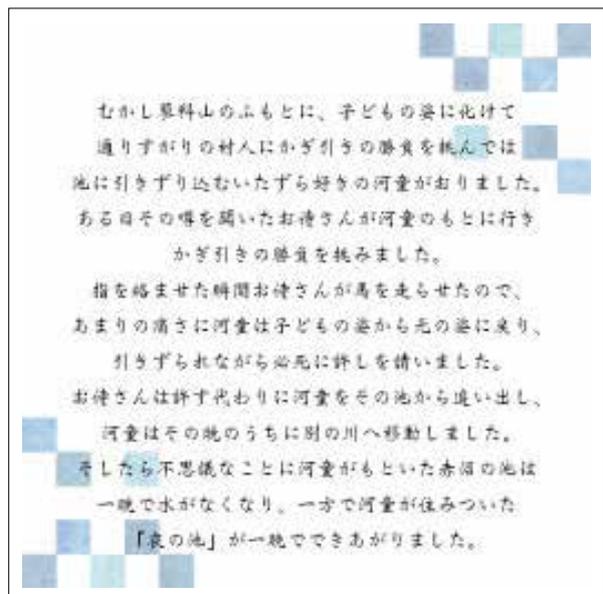
かぎ引き石

四巻の池





<作品・タペストリーのカード>



④めぐりの里の物語（アニメーション）

<企画書>

長和町を舞台にしたテレビシリーズ
めぐりの里のものごとりー



長和町は昔ながらの風景や町並みがのこり時間がゆったりと流れる場所。まわらや木かげになにかがほすんでいるような気配を感じる。ちょっぴり不思議な場所。そんな長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらう。町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。実際にほくもりもある雪割りが最大限に活用できるように、ぬいぐるみペットを使ったコマ撮りアニメーションを使用します。ゆも達の登場時、和風画にほくもぎぎの動物の子供たちの冒険と不思議に満ちた一年をとおる全12話におけるお話を長和町の民話や名物を交えて話しています。

主要キャラクター

- ゆも**
 長和町を舞台にしたテレビシリーズの主人公。ほくもぎぎの動物の子供たちと冒険し、不思議な世界を探索する。
- まわら**
 長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらうために、町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。
- 雪割**
 長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。実際にほくもりもある雪割りが最大限に活用できるように、ぬいぐるみペットを使用したコマ撮りアニメーションを使用します。

あらすじ episode 1 話-5話

1話 春のはじめのお話
 春のはじめ、ゆも達は春の準備を始めています。この準備は、長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらうために、町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。

2話 沢の池の湧きのお話
 沢の池の湧き、ゆも達は沢の池の湧きを観察しています。この湧き、長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらうために、町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。

3話 雪割のお話
 雪割、ゆも達は雪割を観察しています。この雪割、長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらうために、町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。

4話 戸成少女のお話
 戸成少女、ゆも達は戸成少女を観察しています。この戸成少女、長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらうために、町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。

5話 大蛇に出会ったお話
 大蛇、ゆも達は大蛇に出会ったお話を観察しています。この大蛇、長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらうために、町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。



あらすじ episode 6話-10話

6話 町まわりの目のお話
 町まわり、ゆも達は町まわりを観察しています。この町まわり、長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらうために、町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。

7話 山と谷のお話
 山と谷、ゆも達は山と谷を観察しています。この山と谷、長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらうために、町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。

8話 きのこ畑に花まきのお話
 きのこ畑、ゆも達はきのこ畑に花まきを観察しています。このきのこ畑、長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらうために、町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。

9話 季節池のイモのお話
 季節池、ゆも達は季節池のイモを観察しています。この季節池、長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらうために、町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。

10話 羊の長わのお話
 羊の長わ、ゆも達は羊の長わを観察しています。この羊の長わ、長和町の風情や空気感を内外の人に感じてもらうために、町に愛着をもってもらうため、長和町を舞台にしたテレビシリーズの企画を考えました。

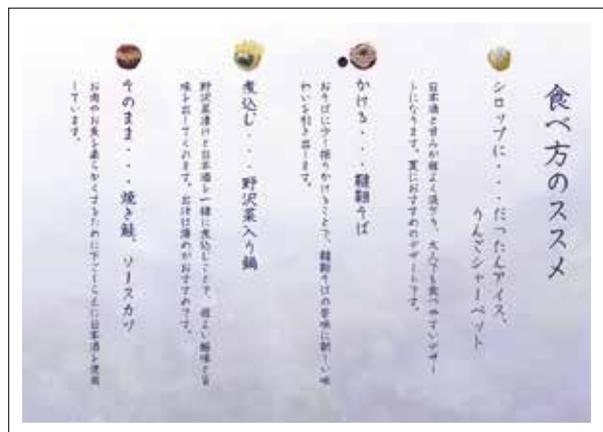
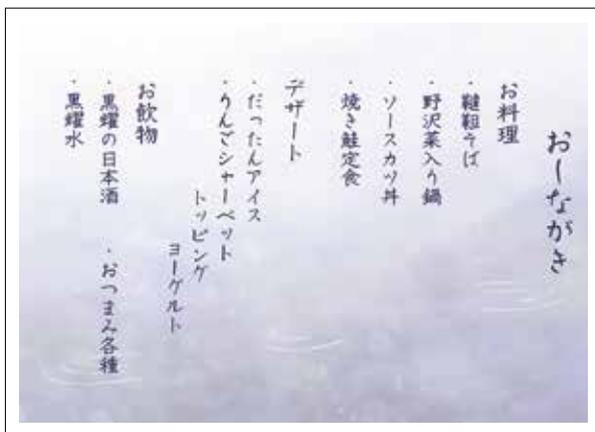


SNSでの配信

テレビシリーズに登場するキャラクターたちは、長和町に実際に住んでいるという設定で、インスタグラムやツイッターで投稿やコメントを交わっています。

実際のペットを撮影した写真や動画のキャラクターを使ったコンテンツは、遠くからでも見ることができ、キャラクターたちの存在をより身近に感じてもらい、関心をもってもらうことがねらいです。



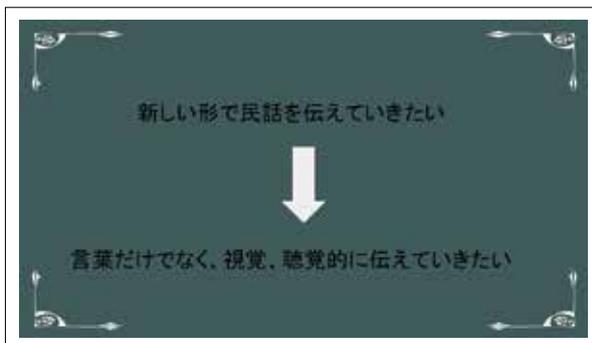
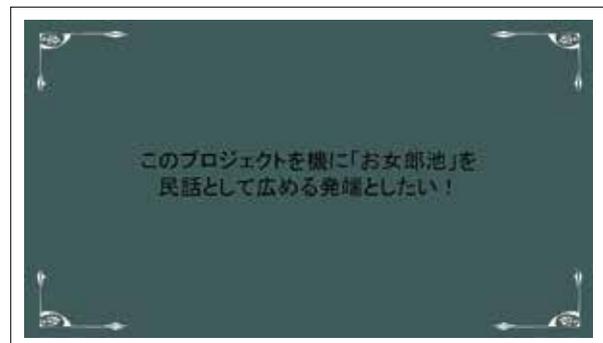
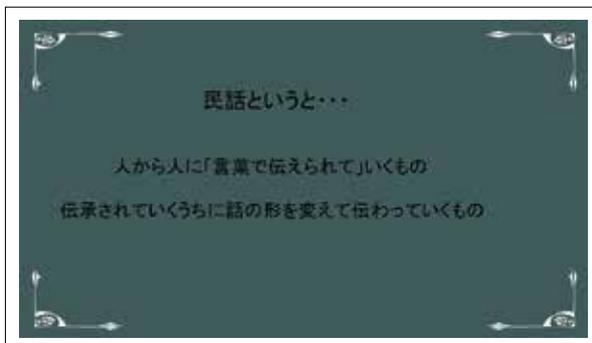
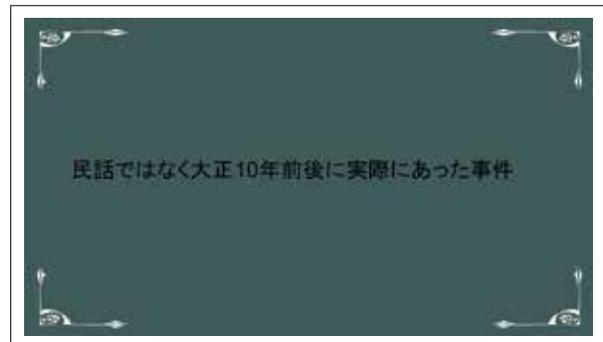


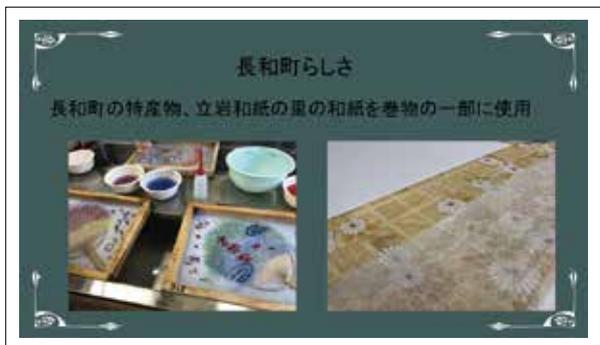
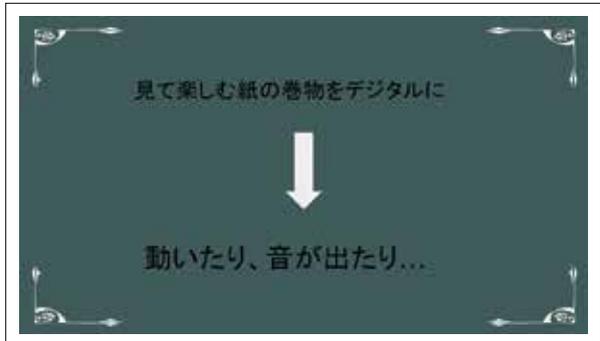
<作品>



⑥女子美×長和町 お女郎池（アニメーション）

<企画書>





<作品映像>



⑦長和町紹介アニメーション

<企画書>

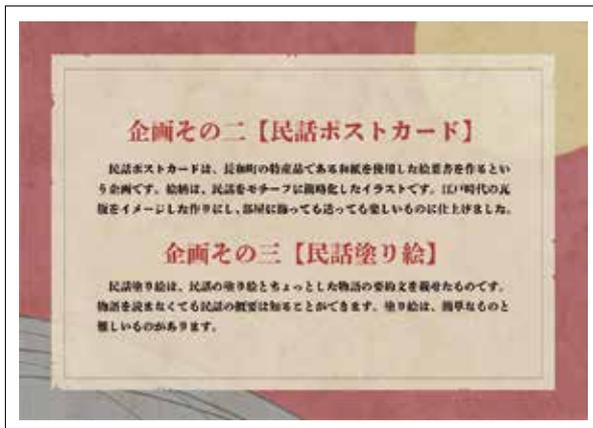
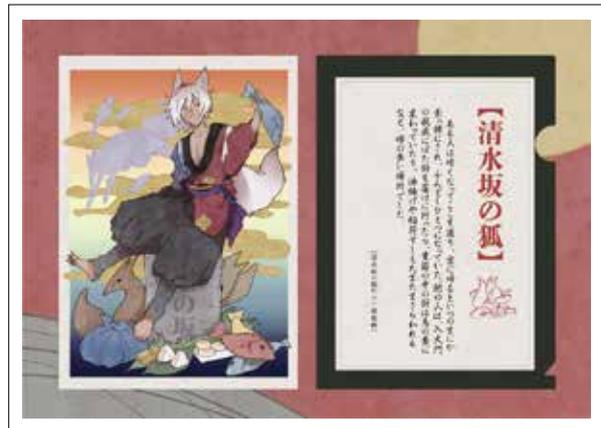


<作品映像>



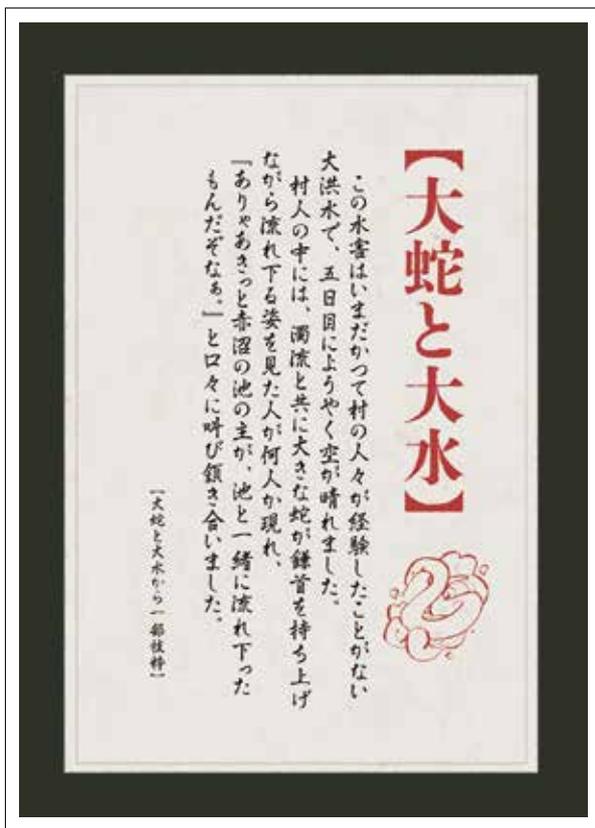
⑧民話クリアファイル・絵葉書・ぬり絵

<企画書>





<作品・クリアファイル>

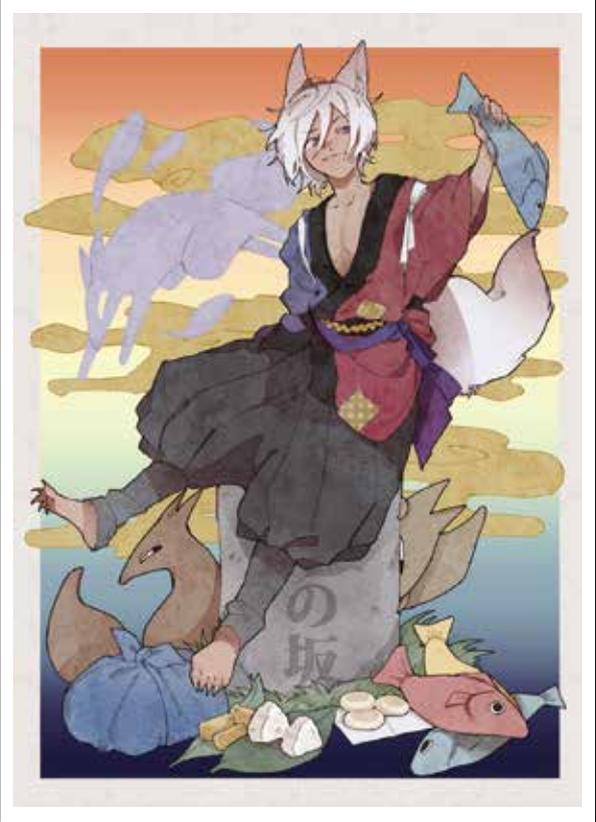


【清水坂の狐】



ある人は暗くなつてここを通り、家に帰るといつのまにか
 素っ裸にされ、ふんどしひとつになつていた。他の人は、入大門
 の親戚にばた餅を届けに行つたら、重箱の中の餅は馬の糞に
 変わつていたり、油揚げや稻荷すしもたまたまさらわれる
 など、噂の多い場所でした。

〔清水坂の狐りら一節抜粋〕



学生が使用した民話

1. お女郎池じょろういけの由来ゆらい

今朝、お女郎池で身投げがあったと、噂はたちまち町中に広がり、可哀相だなあと人の同情を誘いました。そもそもこの人は、越後の片田舎の貧しい農家に生まれました。打ち続く凶作で食べるものもなく、せめて口減らしにと五歳のころ、わずか四～五両（円）の金で、郭に身売りされたのでした。

知らない土地に来て、全然環境の違う社会で、何もわからないことばかりでした。芸を覚えるには、厳しい稽古を毎日毎日繰り返さなければならず、覚えが悪ければ悪いでいじめられ、日夜心の中で、お父さん、お母さんと呼んで、人目を忍んで泣いたとのことでした。そして厳しい稽古と、躰に耐え、ようやく一人前に成長し、一時は郭で一、二と名の出るようになり、ようやく親孝行もできると喜んでおりました。そして近郷の若者たちの目を引くようになりました。

そこへ、ひよんなことに、農家の青年で真面目で心の優しい若者と恋におちいり、末の世まで誓うようになり、国の両親にも知らせたりして、愛し愛されていました。青年は繁く通うようになり、お金の困るようになり、恋は盲目にするとか、この真面目な青年が、心にもなく盗みをしては、彼女のところに通い続けたのです。彼女も自分で都合出来るお金は全部使い果たしたのでした。

悪事の知れないことはないと言われますが、彼の若者はついに逮捕されました。初めての深い深い恋におちいり、男を信じ愛したのに、なんと不仕合わせな自分かと、わが身を嘆き悲しんでいました。また郭の掟と板挟みになり、日夜人知れずに泣き続けて、だれに話すこともまた相談する人もなく、遂に思い余ってあの池に身を投げて、自殺したのでした。

そのようなことがあって、だれ言うもなく「お女郎池」というようになり、そして赤い腹の井守が生息して、人々は女郎の変身とって、気味悪がられたそうです。終わりに、この身投げは大正十年前後でした。

2. かぎ引き石と河童の池

蓼科山のふもと、大門村と芦田村の境に赤沼の池があり、池の南側にかぎ引き石と言う大きな石がありました。峠の道も今とはちがって狭く通る人もあまりありませんでした。

ある日村人がこの池のそばを通ると、かぎ引き石の上に一人の子供がすわっていました。そして「おじさんおれとかぎ引きをしないか。」と言って、太いうでをつき出しました。

村人も面白半分に二人の指と指をかぎにして引っ張りくらべをしました。

するとその子供の強いこと、村人はいつのまにか、ずるずる引きずられ赤沼の池に引っ張りこまれて死んでしまいました。こういうことがたびたびおきました。

こんなうわさを聞いた諏訪の殿様の家来で立木さまという力の強いさむらいが「よしおれが退治してやろう。」と、馬に乗りかぎ引き石まで来ると案の定子供がいて「おさむらいさんかぎ引きをしないか。」と言ったので、「ようし」とばかり馬の上からゆびとゆびをからませると「ピシッ」と馬に鞭をあて馬を走らせました。子供はたまったものではありません。引きずられながら「あいたたあー助けてくれー。」とさけびながら、だんだん河童の姿になっていきました。「おねがいです。命だけはお助けください。そのかわり骨つぎを教えます。」河童はなんとも言えないあわれな声でたのみました。それを聞いた立木さまは「ではゆるそう。これから悪さをしないでないぞ。」と言って、馬をとめ河童から骨を接ぐ秘みつの法と病気をなおす薬の作り方を教えてもらいました。

立木さまは河童に向かって、「おまえはここにいて、また悪いことをしてはいけない。今日じゅうにどこかへ行ってしまえ。」と強くいきかせました。

河童は立木さまにいわれたとり、とぼとぼと山をくだり和田村の夜の池に移りひっそりと住むようになりました。

それまではいっぱいの水がたまっていた赤沼の池はひと晩のうちに水がなくなってしまう、河童が住みついた「夜の池」は、ひと晩で、できあがったそうです。

河童から「骨つぎ」を教えてもらった立木さまの名は全国に知れわたり「立木さま」と言うことばが「骨つぎ」と言うことばみたいになり、今でも大門のお年寄りで「上田の立木さまへかよってよくなった。」という人もいます。

3. 四泊の池

むかし肥後の国（今の九州）に阿闍梨興円あじやりこうえんというえらい和尚さんが住んでいました。信仰が厚く徳の高い和尚さんでしたから「わたしも長生きして多くの人を救おう。」と、毎日考えていました。

いろいろ考えたすえ遠く離れた信州の里に善光寺さまのあることを知りおすがりすることにしました。

さっそく旅の身仕度を整え月参がつさんと言って毎月毎月お参りをすることにしました。海を渡たりけわしい山の峠道をお念仏を唱えながらひと月も欠かすことなく和尚さんの善光寺参りは続けられました。

ある夏の暑い昼さがり、はるばる大門峠を越え大門の四泊にたどり着くことができました。和尚さんは肥後の国を出てから四日目に必ずここで泊まることにしていましたのでみんなが四泊りと呼ぶようになりました。

今はあたり一面のたんぼになっていますが、その頃は青くすんだ美しい池があり、大きな松の樹が立っていました。

池のほとりにたどり着いた和尚さんはほっとひと息ついて、いつものように池の中をのぞきこみました。

いつもだと涼しくなるはずの和尚さんの体は急に火がついたように熱くなりどうすることもできません。

仕方なく一心に念仏を唱え続けました。するとふしぎなことが起こりました。水の面に映しだされた和尚さんの姿はみるみるうちに蛇の姿に変わってしまいました。

そしてそのまま「ザブン」と、大きな音を立てて池の底に消えてしまいました。それからはこの池をみんなが四泊の池と呼ぶようになりました。

青く澄んだ池のほとりの松の樹には旅の笠が懸けてあり、その笠には、

こくにひびあじやりよとまりそなたかかさかけまつ
「此の国は肥後の阿闍梨の四泊や其の名も高き笠懸の松」

とあざやかに記るされており、それからみんなが笠懸の松と呼ぶようになりました。

4. 若宮さま^{わかみや}

むかしの立岩村の人たちは暁に星をいただいて仕事に行き夕べに月をいただいて帰るというようによく働きました。

今日もひとりの村人が朝もやをついて草刈りに、沖にやって来ました。すがすがし朝の空気を、胸いっぱい吸いながらする仕事は、気持ちがよく予定どおり進みました。

朝めし前の仕事でしたからぼつぼつ引きあげようとする、朝もやの向こうから、ガチャガチャと金物がふれ合うような音が聞えてきます。「おやっ、なんだろう。」と思って、もやをすかして音のするほうを見ると、よろいを着けたさむらいらしい人が、もやの彼方にかすんで影絵のように立ちつくして、いっこうに動こうとしません。

ふしぎに思いましたが、こわいもの見たさがてつだって、恐る恐る近寄って見ると、まだ童顔の抜けきらない若武者で、近づいた村人に気づいて、にらみつけるようにしていました。

敵でないことがわかると気が抜けたようにぱったりとそのばにたおれてしまいました。

村人がさらに近寄ってみるとあたりいち面の朝露は傷ついたさむらいの血で真赤に染まり、見るもむざんな姿で若武者がたおれています。近づいた村人に向かって息も絶え絶えな若武者は「生きて武士の名をはずかしめることはできない。介しゃくをしてくれ。」と片手でおがむようにしています。

村人はとまどいましたが身なりや、その気品は名将の御曹司と思われ、あどけない童顔は自分の子供のようにさえ感じ、あまりのむごたらしさに片手で顔をおおいながら思わず「なむあみだぶつ。」と唱えながら、求められるまゝに、持っていた大鎌で介しゃくしました。

このお話が人情の厚い立岩村の人々の間に広がると、若武者の死をあわれみ沖の地を戦没の場所として、ここに手厚く葬り村中でお宮を建て「若宮さま」と呼んでお祭りしました。

5. ^{あずき}小豆^{おんな}とぎの女

大門峠に一番近い小茂が谷の部落は谷あいであり、南の窪から流れだす浦沢川と北側の山吹の沢から流れでる清流にそって部落ができました。

最初の頃は家の数もすくなく、人どおりもわずかでしたし、閑散としていて静かすぎるほどでした。部落のまん中を東西によこぎる浦沢川には木の橋が掛けられ「すぐじの橋」と呼ばれ大門峠の方に旅をする人の便宜もはかられました。

みじかい山国の夏も終わり四方の山々はすでに紅葉がはじまり、肌寒い秋の夕暮のことです。ひとりの村人がすぐじの橋を渡ろうとすると「シクシク」と女のすすり泣くような声が橋の下から聞こえてきます。「おや。」と思って足を止め、きき耳をたてると女のすすり泣く声にまじって「ショキ ショキ ショキ ショキ・・・」と小豆をとぐような音が聞こえてきました。村人は急にこわくなり家にとび帰りました。

こんな話が隣の人から隣の人に伝わると「俺も、おらも聞いた。」という人が数人現れました。なかにいた威勢のよい若者数人がその正体を見とどけることに相談がまとまり、夕暮を待って、一人の若者が橋のそばの物かげに身をひそめていると、話のとおり橋の下から、女の人のおむせぶように、すすり泣く声とともに「ショキ ショキ ショキ ショキ」と小豆をざるに入れて川の中でといでいるような気味の悪い音が聞こえてきました。「それっ、出た。」身を物かげにひそめていた若者のあいずで、待っていたほかの若者数人が、かけつけて橋の下や付近をさがしましたが、なんにも見あたりませんでした。

こんなさわぎがあったせいか、小豆をとぐ音も、女のすすり泣く声も聞こえませんでした。しばらくすると、また聞いたという人がではじめました。

今度は人が通るとすすり泣く声も小豆をとぐ音もぴたっと止み、人が通り過ぎてしまうと、むせび泣く声と小豆をとぐ音のはじまり、驚いて振りかえると音はぴたっと止み、物音ひとつしません。

村の人たち数人がこんな体験を重ねるようになると、いつのまにか「小豆とぎの女」と呼ぶようになり行儀の悪い子供には、「いうこと きかねと、すぐじの橋の小豆とぎの女にくれてしまおうぞ。」と子供をしかるときのことばになっていました。

6. 昇竜の穴 しょうりゅう あな

むかし蓼科山のふもとに近い山奥の部落にいわな釣りがとくいなおじいさんが住んでいました。今日も朝暗いうちに家をでて、いつものように本沢の霧がふちまでやってきました。

霧がふちは二段になった滝が落下し、周囲の岩にぶつかり霧となり数枚の畳を敷き詰めたような平らな岩のうえに降り大木におおわれ、ものすごいかんじのする所でした。

釣竿をかついだおじいさんは、いつものように本沢の道から霧がふちにはいろうとしました。滝から降りそそぐ霧といっしょに冷たい強風がピューと吹き抜けると、どうしたことかおじいさんの体は釘付にされたようになり、頭の先から足の先まで氷のように冷えきって、ものをいうこともできません。

体が倒れそうになるので両足をふん張ってこらえ、前の方を見ると滝つぼの水面から大きな頭を持ち上げた竜がおじいさんに向かって、大きな口をカァーと開き、冷めたい息を吹きかけていました。

あまりの恐ろしさに顔を両手でおいその場にうずくまってしまう、気が遠くなり、そのまま、その場に倒れてしまいました。

それからどのくらい過ぎたことでしょうか……ふと気がついたときは大木の合間から淡い光がさし込んで、滝つぼには虹の橋がかかっていた。恐る恐るあたりを見回しましたが、竜の姿はどこにもありません。

ふしぎなことに、付近の平らな岩に直径三十センチメートル深さ五十センチメートルもあるうず巻きのような穴があいています。

「竜の昇天だ。」思わずおじいさんは大声で叫んでしまいました。

むかしから陽気が良い年は、水中にひそむ竜が天に昇ると伝えられ、そのときにできる穴を「竜ずり」と呼んでいました。竜ずりの穴は大きなもので直径三十センチメートル、小さなものでも十五センチメートル、深さは六十センチメートルから四十五センチメートルでした。こんな穴が七・八个つらなるように平らな岩についています。

竜ずりの穴はお天気を判断し、穴に湿気があるときは雨、乾いているときは晴でした。おじいさんは毎日観察していましたから釣りの名人ばかりでなくお天気博士でとっておりました。「おじいさん今日は雨降らめえない。」と聞きにゆくと、「今日は降りやすぞ。」とあって、いつも村人たちにしんせつにお天気を教えてくれましたから、村人たちから、とつてもだいじにされました。

7. しみずがき 清水坂の狐

大門川と和田川がいっしょになると依田川になります。このあたりにひとりのおじいさんが住んでいました。おじいさんは魚取りの名人で、きれいで冷めたい水によくそだつ岩魚を捕るのが大好きで網打ちや釣りにたびたび出かけました。

小雨がしょぼしょぼと降る日でしたが、夜になるのを待って今日も大門川の上流に向かって網打ちにでかけました。長年の経験で、その日はおもしろいように魚が捕れました。

網を打つたびに魚が捕れるのでおじいさんはときのたつのもわすれて漁を続けました。三キロメートルほど上流の入大門という部落のあるところに来たときは、午前一時になっていました。

「今日は大漁だったし、ぼつぼつ帰ろう。」と網をたたんで大門街道にでると、家の方角に向かっていそぎました。おじいさんは暗い夜でも大門川や大門街道は毎日あるいていますから、自分の家の庭のようによく知っていて、道に迷うようなことはありませんでした。

入大門の部落を過ぎると隣の窪城部落までは一キロメートルばかりあります。この部落と部落の間には「清水の坂」という坂がありました。むかしの清水の坂は急な坂道で道の中もせまく、うっそうとした木々が繁り、ひるでもうす暗くたまたま古狐が出ぼつし、人が化かされるいやなところでした。

ある人は暗くなってここを通り家に帰ると、いつのまにか、すっぱだかにされ、フンドシひとつになっていた。ほかの人は、入大門の親戚にぼた餅を届けに行ったら、重箱の中の餅は馬の糞に変わっていたり、油揚げや稲荷ずしもたまたまさらわれるなど、うわさの多い場所でした。

その夜は小雨が降り、うす気味悪く、なんとなくいやな予感がしました。おじいさんはいそいで通り抜けようと思いました。ところがふしぎなことにおじいさんが帰ろうとする道がスーとやみの中に吸いこまれるように消えて、帰る道がなくなってしまいました。

そして、生ぬるい風がサーと吹き抜けて、繁った木々の葉がざわめき、小雨の露をたっぷり含んだ木の葉から落ちる雨の音に、おじいさんは両手で耳をおおいたい程のおそろしい気持ちになりました。

「はてな・・・狐の仕業かもしんねえぞ。」

おじいさんは、とっさにこんなことを考え腰にさしていた、たばこ入れを取り出し、道ばたに腰をおろし一服つけながら、自分のあせる心をおさえ、「この古狐め。悪さばかりしやあがつて。この網で生捕りにしてくれるわ。」とばかり、ざわめく木立の下をじっとにらみつけました。

すると不思議なことに、今まで消えてしまっていて見えなかった道がポーとかすんで見えてきました。「古狐め。俺の気力に圧倒されて逃げ出しやがった。」と思ひこみ、そのまま家路を急ぎました。

ようやく家にたどりついた頃は、すでに東の空はしらみはじめていました。無事に家に着くと、急に疲れがどっと出て、ねむくなってきました。道具を土間に投げだし、なにはともあれ、ひと眠りすることにしました。

ひと眠りしたおじいさんは、いろりに火をいれ大漁だった魚を料理しようと思い、包丁を取り出し、土間に置いてあった、びくに手をかけたおじいさんは、思わず「あっ。」と驚きの声をあげました。

ずっしりと重いはずのびくは軽々で、びくの中には一匹の魚も入っていませんでした。戸にかぎを掛けてねたから、猫に取られるはずはありません。どう考えても、狐に魚を取られたとしか考えられませんでした。

それ以来、おじいさんの腹の虫はどうしても治まりません。夜網に出るたびことに「清水の坂」を通りましたので、今度こそ狐を捕まえようと気をつけていましたが、古狐はついにおじいさんの前には再び現れませんでした。

8. だいじゃ おおみず大蛇と大水

本沢川は蓼科山ろくの西と北側にあるいくつかの湧水が源流となり大門川と合流し依田川にそそがれています。

この本沢川は両岸がけわしい岩山でおおわれ、水がよどむ、いくつかの深いふちがありました。なかでも箱ぶちは東西が奇岩に囲まれ、うっそうとした樹木が天をおおい激流が数メートルの高さから大きな箱を伏せたような岩つぼへ落下して水煙となり神秘的な感じのするところでした。

むかしから早かんばつが続くと、村人たちはここに来て、いばらをふちの中に切りこんで、「どうか雨が降りますように。」と、お祈りをすると、たちまち黒い雲が天をおおい、雨が降ると言い伝えられていました。その頃の本沢は人がやっと通るだけのせまい道しかなく、猟をする人や行者が通るだけでした。

ある日、えものを求めて村の猟師二人が本沢にやって来ました。長いこと狩りをしている二人ですから獣が通る道はよく知っています。本沢の奥深くまで来ましたが、いつもの獣道とちがったところを誰かが草を分けていったようなあとがあります。「おや、なにものだろう。」と思ひ、そのあとをたどってゆくと、箱ぶちの岸でそのあとは、ぷつぷつと切れています。

おなかがすいたので、持ってきたお弁当を開き、お昼をすませ休息していると、ふちの向こう岸の茂みで「がさっ、と」言う音がしました。驚いて振り向くと、やぶの中に、なんと大蛇ではありませんか。

おそろしいので二人はたがいに顔を見合わせていましたが、ひとりの若い猟師がそばにあった鉄砲を取ってかまえました。「うつな、うっちゃあいけねぞ。」年上の猟師のことばが終わらないうちに「ずどん、と」すごい音が四方の山や谷にこだまして、みごとに大蛇の頭を打ちぬきました。

大蛇は驚き大きな体を持ちあげると、するすると動いて、「ばっしょん、と」大きな水音をたてるとふちの中に飛び込みました。

二人は鉄砲をかまえ水面をじっと見つめていましたがふちの奥深く沈んだ大蛇は再び浮きあがって来ませんでした。恐る恐るふちの中をのぞき込んでみましたが、影もかたちもありません。

気が抜けたようにポカンとしていると、ふちの中からもうもうと霧が立ち昇り、真黒な雲が空をいっぱいにおおいはじめ、気味がわるくなり、その場にいたたまず、いちもくさんに家に逃げ帰りました。

その日から大粒の雨が三日も降り続き、なお雨は止まずに降り四日目はついに大豪雨となり、大門をはじめ長久保や古町、立岩の村々で、数十軒の家が流され、数十名の人たちが亡くなりました。

この水害はいまだかつて村の人々が経験したことのない大ごう水で、五日目ようやく空が晴れました。

村人の中には、だく流とともに大きな蛇がかま首を持ちあげながら流れ下る姿を見た人がな
ん人か現れ、「ありゃあきつと赤沼の池の主が、池といっしょに流れ下ったもんだぞなあ……。」
と口々に叫びうなずき合いました。

9. 大水と芝宮の宮守

古町の集落は長門町を南北に貫く、依田川に沿って中世の頃段丘の下に宿場町として開けた町でしたから、たえず水害の危険にさらされていました。

自分たちの家や田畑を守るために、水魔との戦いは古町に住む人たちの宿命でした。今のようには機械はありませんし、土木技術も発たつしていませんでしたから、水を防ぐためには、みんな人の力にたよっていました。

ですから、小さな水害は毎年毎年くり返され、そのたびごとに村中で水防にあたりました。ときには、依田川に沿って築かれていた千五百メートルもある堤防がみんなこわされてしまい家も二十軒も流されたこともありました。

水を防ぐのに古町の人たちが一番気を配ったところは上川原（現在のかまば）付近でこの堤防がこわれると水が侵入し、上宿はもちろん中宿も下宿も流されてしまいますから、ここは堤防だけでなく、川除林といって木を植え村の保安林として厳重に保護をして水害に具えました。

寛保二年の八月二日といわれていますから、夏も盛りの頃です。数日降り続いた雨で、昼頃から大ごう水となって依田川を流れ上川原の堤防は、今にもくずれ落ちそうになり、上の段の南端に祭られている諏訪社、芝宮の段丘はだく流の直撃を受け、段丘の一部がくずれはじめました。さあたいへんです村では早鐘を打ち鳴らしこの危険をみんなに知らせました。

早鐘をあいずに村中の働ける人はみんな芝宮の辺に集まり、木の枝を切りおろし、縄で継ぎ合わせて水よけにしたり、わくを丸太で組み、石を載せて水を防いだり、俵で土のうを作って積みあげて水の侵入するのを防ぐなど、水魔との死闘が数時間続けられましたが雨は降り続き水勢はますます強くなるばかりでした。このまゝですと古町が流がされてしまうのは時間の問題だ、とさえ思われました。

もう運を天にまかせる思いで、ぼう然としていると、‘ばっしょん、と大きな音がして、芝宮の大木が倒れ、依田川のだく流に飲みこまれました。ほんの一瞬のできごとでしたが、この御神木が堤防につっかり、防水の役を果たし、古町はかろうじて水難をのがれました。

けれども、この付近は、依田川のだく流が満々とたゝえられ、中島沖は流れ、たたえられた満水の中から腹の真っ赤な大じゃが、かまくびを持ち上げて四方を見まわし、水の中に沈んで流れてゆきました。みんなが「芝宮の宮守だ」と驚きの声をあげました。

10. とばやま ふるぎつね 鳥羽山の古狐

むかし長門町と丸子町の境にある鳥羽山という山にしっぽの先が三十センチメートルほど白い狐が住んでいました。狐は鳥羽山を中心に滝の沢や仙石原まで行動し、たまたま人を化かしてしました。

ある人は滝の沢から佐久の親戚に行こうとして、昼食をすまして家を出ましたが、仙石原で化かされ、半日中道に迷って暗くなってからやっと自分の家にたどりつき、その日は親戚に行くことができませんでした。

また旅に出ようとして朝早く家を出たのに、昼さがりの頃、浦山で「オーイ オーイ。」とその人の声があるので、近所の人々がかけつけてみると、自分のゆく道がわからなくて助けを求めたりしています。忘れた頃になると、まただれかが化かされます。ひどいときは、鉄砲を持っている狩人まで化かすこともありました。

「何とか古狐を退治しなきゃあー。」

こんな声が村人から聞かれるようになりました。みんなそれぞれわなを掛けてみたり、毒を油揚げの中に仕込んで仕掛けたりしましたが狐は、しらん顔で振り向いてもみませんでした。

どうをにやした村人たちは、村中で狐狩りをすることにしました。木蔭や草むらの中にひそんでいる古狐を追いだして鉄砲で仕とめようというのです。

狐を追いつめて仕とめる場所は、広々とした仙石原と決まりました。せこといって狐を追い出す役や、追い出された獲物を待ちかまえていて鉄砲で仕とめるたつのふたてに分かれて狐狩りをはじめました。「こんだっこさ古狐の野郎もおだぶつだわい。」……

みんな意気込んでいますから「ホーイ ホイ ホイ ホイ」と狐を追い出す掛声も一層高くなり、まわりの山々にこだましました。すると草むらの一角がばさばさと揺れて、大きなしっぽの先の白い狐が飛び出しました。「それ出た。」みんなが大声をあげると飛びだした狐は、狐を追い出す役の大勢いるせこの方に向かって、まっしぐらに走り出し、あっという間にせことせこの間を走り抜けて、ゆくえをくらましてしまいました。

全くたちの悪い古狐です。みんな気抜けして、もう手の打ちようがなくなっていました。

それからしばらくたってからのことですが、数十人のわんぱく盛りの子供たちの集団が遊びつかれて仙石原の方から岡森の部落をとおри、家に帰ろうとして滝の沢の部落を通ると家々で飼っている犬が子供に向かって一斉にほえだしました。すると集団の中にいた一人の子供がいま来た道をまっしぐらにかけだしました。みんながあっけにと取られていると犬に追われた子供

は四つんばいになって走ったりして山の中に走りこんでしまいました。

それはほんの一瞬のできごとで、子供らは、顔を見合わせていましたが仲間の一人がいなくなっているのに気づいて大さわぎになりました。秋の日は短く日は西の山にとっぷりと沈み、あたりはうす暗くなってきました。

さあたいへんです村の人々はたい松を持ち出し、付近の山々を徹夜で探しましたがそのかいもなく子供の姿はどこにも見当たりません。いちど家にもどって、朝めしをすませて出なおすことにしました。

徹夜の探索ですっかりつかれた一同が朝食を済ませて再び探しに出ようとする、十数キロメートルも離れた隣り村の山中で、子供が見つかったという連絡がきました。

「いったいどうなったずら。」とみんなが心配して、知らせに来た人の話を聞いてみると、子供は疲れているだけで元気だったが、夜露でぬれた着物には白と茶色の狐の毛が一面につき、子供が見つかったあたりの地面には動物の血がてんてんと落ち、狐の毛がいっぱい抜けて散っていたというお話でした。

こんなさわぎがあったそれ以後は、しっぽの白い狐を見た村人はなく化かされたという人もいなくなりました。

11. 伝蔵でんぞういなり稲荷

むかし長久保宿のはずれに伝蔵という人が住んでいました。伝蔵は貧しかったがまじめで働き者でしたから、「伝蔵さん、伝蔵さん。」とあって、とってもかわいがられていました。

お人よしで働き者の伝蔵に困ったことがひとつありました。それは、伝蔵がときどき狐に化かされることでした。

今日も朝からうつろな目をして狐のように「コンコン」とないてみたりピョンピョンはねたりして久津根稲荷様くつねいなりさまと自分の家を往ったり来たりしたかと思うとお稲荷様の周りをいくどもいくどもわけのわからないことをつぶやきながらものに取りつかれたようにぐるくるまわっているのです。

近所の人たちがみかねて、「伝蔵さんどうしただい。」と言って、伝蔵をなだめて家につれて帰り、その日は無事に終わりました。

次の日の朝、昨日のことが心配になった近所の人たちがおそろおそろ「伝蔵さん、おはようごわす。」と、声をかけると、中から、「朝早くからだれでごわす。」と、伝蔵さんの元気な声が帰って来ました。

みんながポカンとしていると、伝蔵の家の玄関の戸が中からガラッとあいて「やあみなさんおそろいで、なんかありやしたか。……」まじめでお人よしの伝蔵さんの柔和な笑顔を見てみんなほっとしました。

「きんなはどうしただい。」一人が声を掛けると、「わし、きんな、なんかしやしたかい……。」伝蔵さんは昨日のできごとは全く知らないようです。

お人よしでまじめな伝蔵さんの顔を見ると、近所の人たちも昨日のできごとをどうしても聞く気になれません「伝蔵さんが元気でやってりゃあいだわい。」近所の人たちは、そそくさと伝蔵の家から立ち去りました。

そんなことがたびたびありました。「どうもおかしい。ただじゃあねえぞ。狐がついているじやあねえかなあ……。」一人が言いだすと「そうだそうだ。それに相違ねえ。」みんながそう思っていました。

みんなが集まって伝蔵についている狐払いをすることになりました。それには長久保宿のはずれ東山のふもとにお祭りしてある久津根稲荷様くつねいなりさまにお願いするのが一番よいということに話が決まりました。

ボタ餅を作りました。厚い油揚げもたくさん作ってお稲荷様に供え神主さんをお願いし、お稲

荷様の前で伝蔵を真ん中にして、「狐はお稲荷様のお使いだと聞いています。どうかまじめでお人よしの伝蔵のからだから狐を取ってください。」とみんなでお願いし、神主さんにお払いをしてもらいました。

あらたかな久津根稲荷様のごりやくがたちまち現われて、それ以来伝蔵は狐に化かされることがなくなり、だれがいうともなく久津根稲荷という呼び名のほかに伝蔵稲荷と呼ぶようになりました。

12. 蓼科山と甲賀三郎

むかし蓼科のすそに小さな村がありました。ここに甲賀太郎・二郎・三郎という三人の兄弟がありました。三人は若者になりそれぞれお嫁さんを迎えました。

ところが末の三郎のお嫁さんは、とっても美しいお嫁さんでした。二人の兄は『三郎の奴あんなきれいなお嫁さんをもらって生意気だ。』とばかり嫉妬し、三郎を連れ出し蓼科山のいただきにある岩穴にやってきました。

穴は人がやっとはいれるくらいの大きさで、中はまっくらで『オーイ』と声をかければ、その声はどこまでもとんでいってとまりません。二人の兄は三郎に言いました。『三郎や、この穴は龍宮までつながっている。はいつて見ろ俺達も行く。』といて、付近に生えているクソ葉藤のつるを集めて藤籠を作り、三郎を藤籠に乗せ岩穴につりさげました。

なにしろ岩穴は龍宮まで続いている穴ですから、あたりに生えている藤づるはみんな取ってしまいました。藤籠がいいかげんにさがったとき、つりさげられていた藤籠は、あつというまにすうっとくらい穴のおくにそのまますい込まれてしまいました。

二人の兄が三郎をだまして、藤を途中から切ったからです。三郎は、まっくらな世界を手さぐりでさまよいあるき、力つきて死んだようにたおれてしまいました。

それから、どのくらいたったことでしょうか。ふと三郎が気がついてみると、りっぱなごてんにねかされていました。

そこは龍宮だったのです。庭には一年中いろとりどりの花が咲きみだれ鳥がうたいおいしい食べ物のごっそり、お話に聞く楽園そのものでした。

あつというまに十三年がすぎましたが、いつも三郎の頭の中からきえないのは、美しくてやさしい妻の顔でした。どうにかして蓼科のふもとにかえりたい、大勢の人がとめるのも聞き入れずわかれをつげ、すこしも休まず闇の中をひたすらあるきつづけました。

やつと待ちに待った地上近くまで来ると頭の上がぼうっとかすんでいたもので、そこから抜け出そうとすると、それは浅間山のふもと小沼（御代田町）にある真楽寺の池で三郎の体はいつの間にか、蛇身（へび）になっていました。

三郎はへびになった自分の姿をみてかなしみましたが、蓼科をめざしてまっしぐらにのぼりました。蓼科山のとっぺんにたつた三郎の体は岩にぶつかり木の根につきさゝり血だらけでした。身も心もつかれはてた三郎は大声で妻の名を呼びながらたおれてしまいました。

そのとき遠くの方から細い女の声で『三郎さーん。』と聞こえてきました。その声は恋しい恋

しい妻の声だったのです。『三郎だよ、三郎だぞ。』いうが早いか三郎はガァーと空にとびあがり龍の姿に変わりひとつとびに空をつっ走り諏訪湖のまん中へバシャンととび込みました。

まえに三郎を蓼科山でうしなった妻は悲しみのあまり龍になって湖の底にさみしく住んでいたのです。

二人はいつまでもいつまでもだきあっていました。

13. 不聞^{きかず}どうろく^{じん}く神

中山道の長久保宿の人たちは、いろいろな願いごとを町はずれの道祖神様にお願いする習わしがあって、「どうろくじん様」と呼んでいました。

「どうろくじん様」は魔者や疫病が町にはいりこまないように、町の入口でおさえこんでしまったり、追い払ってくれるし、旅人の道案内もしてくれるので、幸福の神様だと信じていました。

ですから、お祭りがある二月にはいと、家々ではお祭りに使う藁馬^{わらうま}を作ったり、お萩餅を搗くために餅米も用意しました。

山国の二月は、とても厳しい寒いときですが、農閑期なので、今日も数人の人達が寄り集まって、いろりを囲み、よもやま話にふけていました。

「今年は、おらいちの娘も、いい縁談があるかも知れやせんぞ……。」「そうでない。今年、朝早かつたない。お詣りにいったじゅうじゃあ一番早かつつら……。」人々の会話には、ほのぼのとした暖かさが感じられます。

道祖神のお祭りは二月八日で、その日は朝早く起きてお萩餅を作り、道祖神様にお詣りし、道祖神様の顔にお餅のあんこを塗ると良縁が得られるという風習がありました。

「ところでさあ、おらあ困っているだわい、孫の耳がふさがっちゃって聞けねだわい、どうすりゃあいいづらない。」と一人のおじいさんがなやみごと打ちあげました。三、四人集まると楽しい話に続いてなやみごともです。

「どうだい、どうろくじん様にたのんでみたら……」仲間の一人がこんなことをいいたすと、い合わせた人々は「それがいいぞい、そうしてみなんし……。」とみんな賛成しました。

おじいさんは、ものは試したと思い、町から一・五キロメートルも離れている道祖神様に、「どうか孫の耳を治してください。」と、雪の降る日も、つめたい風の吹く日も欠かさずにお詣りを続けました。

一か月が過ぎ、二か月が過ぎても、おじいさんの道祖神詣りは続けられ、延百日になろうとしたある日のことです。今日も朝早く起きて、お天気の良い日でしたから孫の手を引きいつものようにお詣りをすませて家に帰ろうとしました。

その日はよいお天気だったのに、南の空がにわかにくもりピカピカとすると、するどいせん光と「ゴロゴロゴロ」と耳をつんざくようなものすごい雷の音になり響きました。あまりの恐ろしさにおじいさんも孫もその場に倒れ込んでしまいました。

それからどのくらいたったことでしょうか……夕立がやんでさわやかな初夏の涼風が倒

れているおじいさんの顔にあたり、ようやく正気にもどり、うつろなまなこで起きあがると、がけの下を流れている依田川には七色の虹の橋がかかっていました。

おじいさんははっとして、そばに倒れている孫をだき起こすと孫もようやく気がつき「でっけい雷の音おっかねえ。」とっておじいさんのひざにすがりつきました。

おじいさんは、とびあがって喜びました。今まで聞こえなかった孫の耳が聞こえるようになったのです。うれしくてうれしくてたまりません。何とかお礼をしたい。でもうちは貧しくてお金がない。いろいろ考えたすえ、家で一番だいじにしていた家宝のお椀をお礼にさしあげることになりました。

おじいさんは、家の宝にしていたお椀が、人の耳のように思えてなりませんでした。耳の穴がつまって聞こえなかったとっていましたから聞こえるようになったのは、もとのように耳に穴が開いたのだと信じ、お椀の底に穴をあけ、ひもを通してさしあげることになりました。「どうろくじん様。ほんとうにありがとうございます。」とってお椀を供えて、ていねいにお礼のお詣りをしました。

これが町中の評ばんになり、隣り村の大門や、和田・古町のほうからもお詣りに来る人がふえて有名になり、耳の病気がある人にとてもごりやくがあるということで、普通の言葉とは反対の言葉で、「不聞どうろくじん」と呼ばれるようになりました。

普通の言葉と反対の言葉が使われるようになったのは戦国時代の名将武田信玄が敵をあざむくために使った言葉ですが、うそをつくために使われた言葉が、長い間にほんとうの言葉のようになってしまい、「不聞どうろくじん」の、「不聞」というのもそのひとつです。